宮城県文化財調査報告書第49集

清太原西遺跡
船渡前遺跡

1977・3

宮城県教育委員会
宮城県道路公社

序

この報告書は，宮城県教育委員会が，宮城県道路公社の委託を受け，名取川左岸に点在する遺跡群のうち，清太原西，船渡前の２遺跡について，その記録保持のため，発掘調査を実施した結果をまとめたものです。

仙台平野は，肥沃な耕土に恵まれ，その上気候が温和で，古代から人々の生活の舞台として開け，このたびの発掘調査の対象となった２遺跡のほか，三神峯遺跡，南小泉遺跡等著名な遺跡が数多く所在していることで知られており，これら仙台平野における遺跡を発掘調査することは，郷土の古代をたどる上で重要なものと考えられます。

発掘調査は，長雨等によって難航しましたが，関係各位の御協力により，清太原西遺跡では縄文時代の集落跡の一部の発掘により，また，船渡前遺跡では弥生時代の遺物包含層の発掘によって多くの貴重な遺物を発見する等，多大の成果を上げることができました。

この報告書が，関係者や一般の方々に広く活用されるよう希望しますとともに，県民の文化財保護に対する理解の一助となりますよう祈念いたします。

昭　和　52　年　3　月

宮城県教育委員会教育長　**津　軽　芳三郎**

序

近年社会経済の進展に伴って社会環境の整備が強く要請されているところでありますが，特に仙台市を中心とした，所謂仙台都市圏は中枢管理機能としての性格から，仙台新港，東北自動車道の完成を初め東北新幹線の早期実現等基幹交通の整備と合わせて，関連交通ネットワークの整備が緊要となっております。

このような観点から，県道仙台南インター線である仙台市郡山から同市山田までの区間5.4キロメートルを改築し，有料道路として建設することになり，昭和48年から事業を開始しているところであります。

たまたま，この路線内にある山田字清太原地内及び船渡前地内が，埋蔵文化財の遺跡であることが判明しましたので昭和51年8月，宮城県教育庁に委託し調査して参りましたが，長雨等悪天候にもかかわらず，関係各位の努力によりまして，約２千年前の米作にかかわる貴重な資料収集等，多くの成果を挙げたことは誠に喜ばしき限りであります。もとより現代文明社会は先人の努力によって築かれたものであり，これら歴史的文化遺産を保護することによって，新時代への活用にもつながるものであることから，この調査結果を通して今後の総ての活動の指針になれば幸いです。

最後に，この調査に当って御尽力をいただいた県教育庁文化財保護課及び調査担当者、地元関係者に対し深く感謝を申し上げる次第であります。

宮城県道路公社

理事長　土　肥　春　夫

例　　言

1．本書は，仙台南道路建設工事に伴う，清太原西遺跡の発掘調査報告書および船渡前遺跡の発掘調査概報である。

2．遺跡所在地：清太原西遺跡・仙台市山田字清太原――遺跡記号ＥＣ（県遺跡地名表．01169）
　　船渡前遺跡・仙台市山田字船渡前―――遺跡番号ＥＤ（県遺跡地名表．01171）

3．調 査 期 日：ＥＣ　昭和51年8月2日～8月26日
　　ＥＤ　昭和51年8月27日～10月30日

4．調査主体者：宮城県教育委員会
　　宮城県道路公社

5．調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

6．遺 跡 面 積：ＥＣ：約3,000㎡，実発掘面積：約　720㎡
　　ＥＤ：約7,000㎡，実発掘面積：約2,500㎡

7．調査協力者：阿部サキ子，大里なよ，阿部よね子，阿部みさを，阿部しのぶ，板橋みのり川村きく，板橋たかえ，阿部さつよ，菱沼ハナ子，板橋慶子，高橋とし子，板橋さくみ，板橋美春，板橋みどり，板橋さつき，高野斉，菅井透，佐藤隆典，五十嵐輝雄，弥勒寺伸一，板橋健一，川井喜博，戸嶋三雄，板橋昭二，菅井徳治，大里定男，森剛男，横田康正，阿部喜蔵，下山隆志

8．本書の執筆，編集は宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

9．本書において土色については「新版標準土色帖」（小山，竹原：1967）を，土性については国際土壌学会法の粒径区分を参照した。

10．本書第２図は建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５万分の１地形図を複製したものである。（承認番号，昭51東複第513号）

11．仙台市西南部の遺跡（第２図）は，宮城県遺跡地図をもとに作成し，遺跡番号は便法上組みなおし，必要な遺跡にのみ付した。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 1

Ⅱ．遺跡の位置と環境 2

清太原西遺跡 5
Ⅰ．調査の内容 7
１．調査の方法と経過 7
２．出土遺物 8
Ⅱ．まとめ 9

船渡前遺跡 11
Ⅰ．調査の内容 13
１．調査の方法と経過 13
２．調査の概要 13
１）基本層序 13
２）遺構 15
＜土壙＞ 15
＜溝＞ 16
３）出土遺物 17
＜土器＞ 17
＜石器＞ 28

Ⅱ　考　察 32

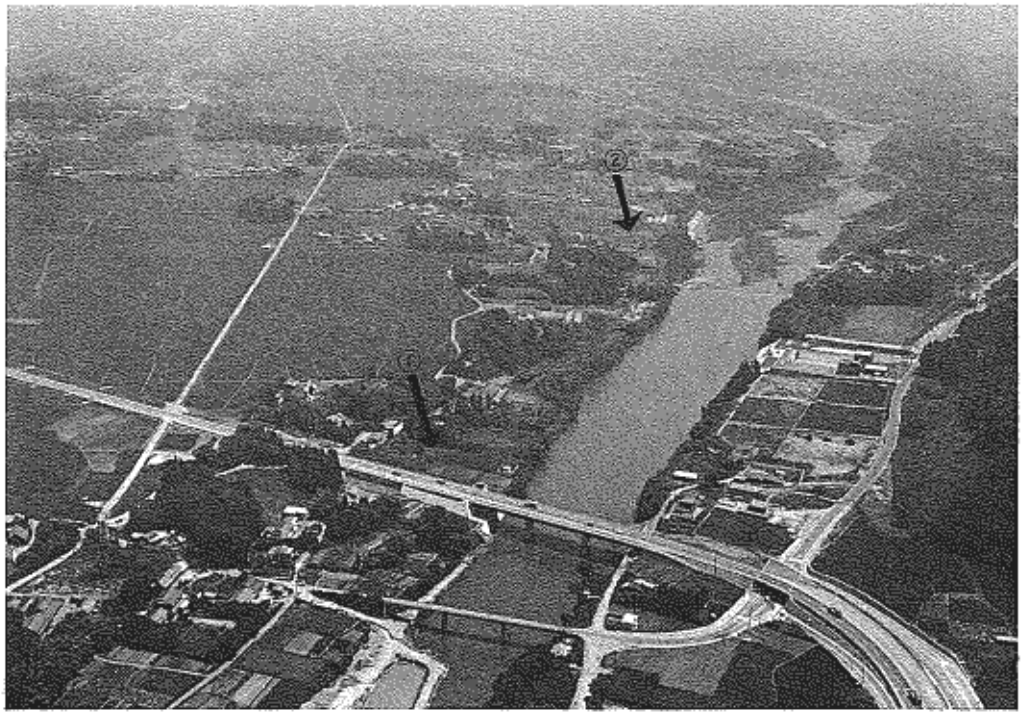
Ⅲ　まとめ 35

Ⅰ　調査に至る経過

宮城県道路公社は，東北自動車道，仙台南インターと国道４号線を結ぶ名取川左岸の有料道路の建設事業を実施している。宮城県教育委員会はこの有料道路計画地内の埋蔵文化財について調査の依頼を受け，今回の発掘調査を実施したものである。

昭和49年，道路公社より有料道路建設予定地内にかかる名取川左岸の埋蔵文化財の所在について協議があり，これにもとづいて昭和50年4月15日分布調査を実施した。調査の結果，清太原西遺跡と船渡前遺跡がかかることが判明した。両遺跡とも周知の遺跡で，前者は石器・土師器・後者は縄文土器（大木９式）・石匙・弥生土器・土師器を出土することで知られており，分布調査の際にも若干の遺物を採集することができた。

その後昭和51年7月21日に法線との関係で再度現地調査を実施し，県道路公社と数回にわたって調査についての打合せを行なった。その結果記録保存の処置をとることになり，文化財保護課が委託を受け，調査を実施したものである。



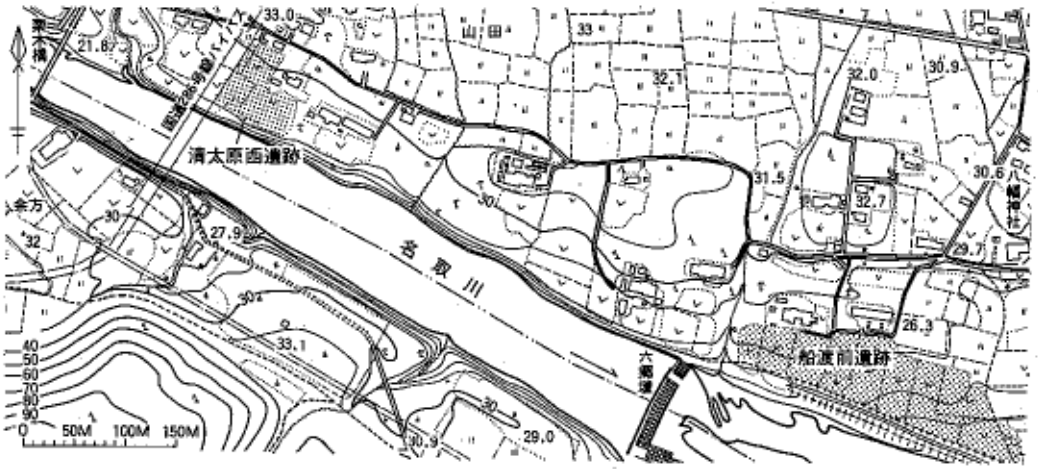
写真Ⅰ　清太原西①・船渡前②遺跡遠景（航空写真）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

清太原西遺跡は東北本線長町駅の西方約4.9㎞，仙台市山田字清太原に所在する。船渡前遺跡は清太原西遺跡の東方約400㎜の地点，仙台市山田字船渡前に所在する。この両遺跡は仙台市の西南部に位置し，南側は奥羽山脈から派生した高館丘陵，北側には青葉山丘陵および段丘が張り出している。この２つの丘陵を開析して名取川が流れている。名取川沿いでは赤石付近から下流の山田付近にかけ幅１㎞前後で洪積丘陵が分布する。洪積丘陵は山田付近で上の原段丘，東原・山田段丘に分離されている（国土地理院:1974）両遺跡は東原・山田段丘崖から名取川に向ってゆるやかに傾斜する沖積段丘の微高地上に立地している。今回の調査を実施したのは，この微高地の南緩斜面で名取川の縁辺にあたる。標高は両遺跡とも25㎜～30㎜程度で，現在畑地に使用されている。

仙台市内における両遺跡の歴史的環境を概観すると次のようになる。

現在発見されている最古の遺跡は青葉山遺跡で，旧石器時代後期の遺物が採集されている。縄文時代の遺跡は，三神峯遺跡をはじめ清太原西遺跡周辺の，羽黒台遺跡・羽黒堂前遺跡・北前遺跡・上ノ山遺跡・町遺跡・上野遺跡等50か所が確認されている。立地は多岐にわたるが丘陵斜面，台地，段丘及びその縁辺に多い。弥生時代には，南小泉遺跡・西台畑遺跡・藤田新田遺跡・六反田遺跡・大野田遺跡等17か所の遺跡がある。その多くは名取川流域と広瀬川流域の自然堤防やその後背湿地及び両河川に面した青葉山段丘縁辺に立地する。船渡前遺跡は名取川流域の遺跡群に含まれる。古墳・奈良・平安時代の遺跡は，遠見塚古墳，安久東遺跡，竹ノ内遺跡，八幡西遺跡等233か所に及ぶ。集落の立地は弥生時代以来の伝統が引き継がれているが，より氾濫平野の微高地に多い。中世以後の遺跡を含めて現在総数は316か所である。



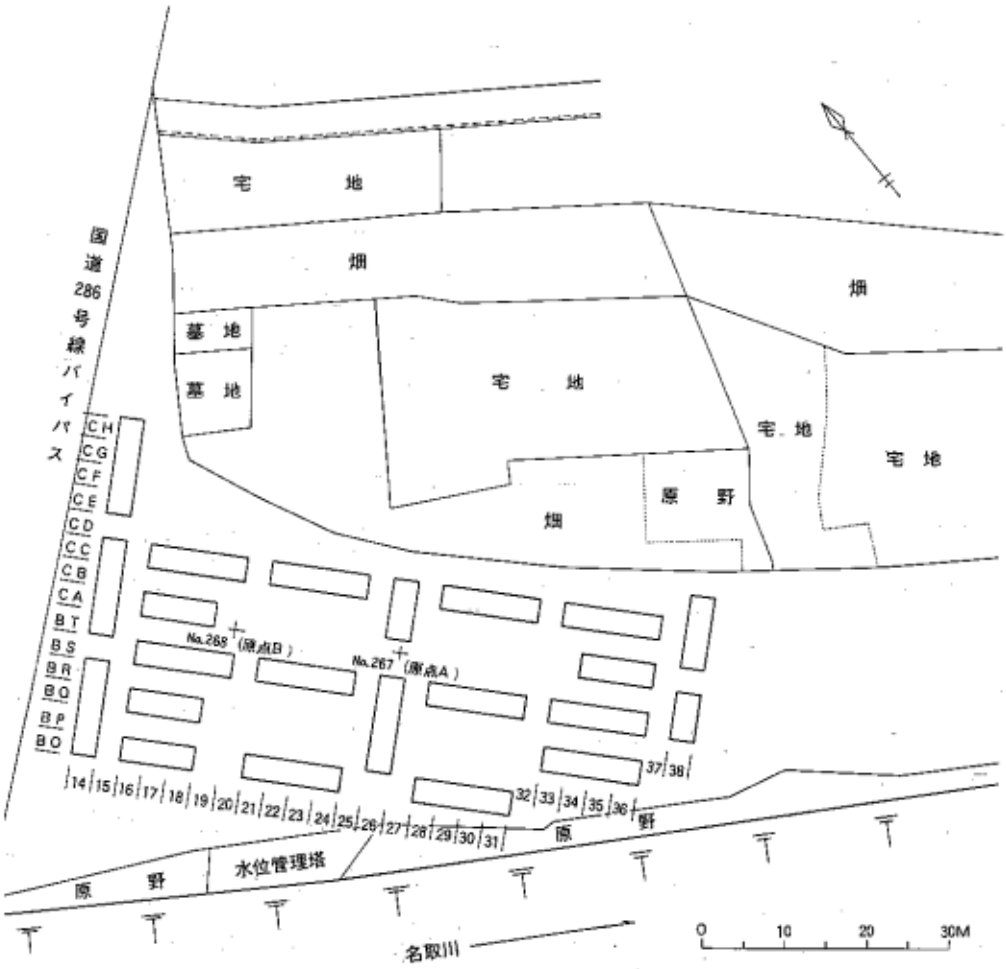
第Ⅰ図　清太原西・船渡前遺跡周辺の地形

1．清太原西遺跡	2．船渡前遺跡	3．青葉山遺跡	4．三神峯遺跡	5．西台畑遺跡
6．上ノ山遺跡	7．西台遺跡	6．町遺跡	9．北前遺跡	10．羽黒堂前遺跡
11．羽黒台遺跡	12．六反田遺跡	13．大野田遺跡	14．丙田通遺跡	15．竹ノ内遺跡
16．下中東遺跡	17．上野遺跡	18．八幡西遺跡	19．安久東遺跡	20．栗遺跡

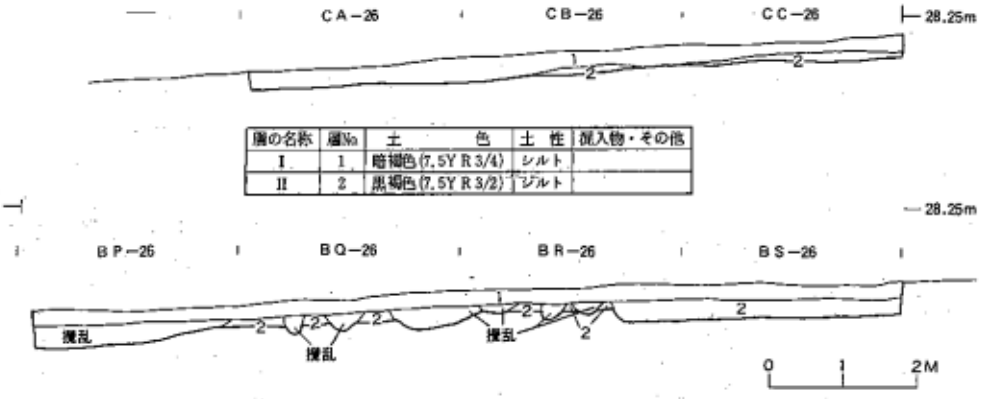
第２図　仙台市西南部の遺跡（分布図）

清太原西遺跡発掘調査報告

せいたはらにし



第３図　清太原西遺跡グリッド配置図



層の名称	層No	土　色	土　性	混入物・その他
I	1	暗褐色(7.5Y R 3/4)	シルト	
II	2	黒褐色(7.5Y R 3/2)	シルト	

第４図　CC－26～BP－26区西壁断面図

Ⅰ 調 査 の 内 容

1．調査の方法と経過

1）調査区の設定

遺跡全体に，路線中心杭№267（原点A）と同№268（原点B）を結ぶ線を基準とし，それに直交する線を設け３m単位のグリッドを組んだ。原点Bを基準としてその東側を20区，西側を19区，南側をＢＴ区，北側をＣＡ区とし，それを延長してそれぞれグリッド名を付した。さらに，アルファベットによる区名の表記についてはA～Tを一つの大きな単位とし，その単位ごとに区別する方法をとった（ＢＡ～ＢＴ区，ＣＡ～ＣＴ区など）。

2）発掘の方法と経過

発掘の方法としては，４グリットを単位としたトレンチ（一部，路線幅などによる制約もあって２・３グリッド単位のトレンチ）を３列おきに設定し，遺跡の範囲，遺構の分布状況などを検討した。その結果，遺構や遺物包含層は確認できず，大部分のトレンチは耕作などによって攪乱を受けており，微量の土器片，石器が出土するにすぎなかった。

3）実測図の作成

発掘した範囲については$^{1}/_{300}$の平面図を作成した。また，南北２か所，東西１か所で1/20の断面図を作成した。

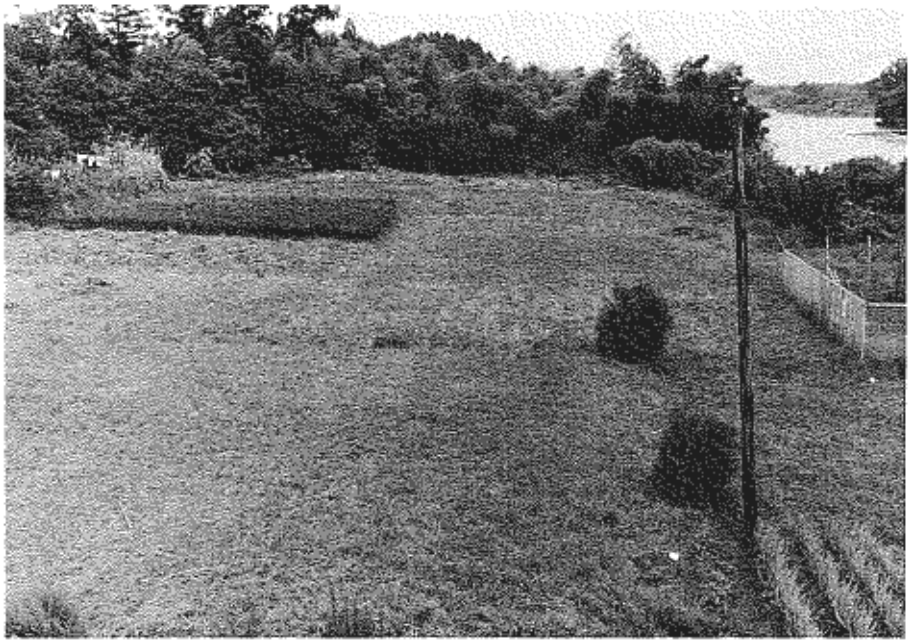


写真２　清太原西遺跡発掘前（西側より）

２．出土遺物（第５図）

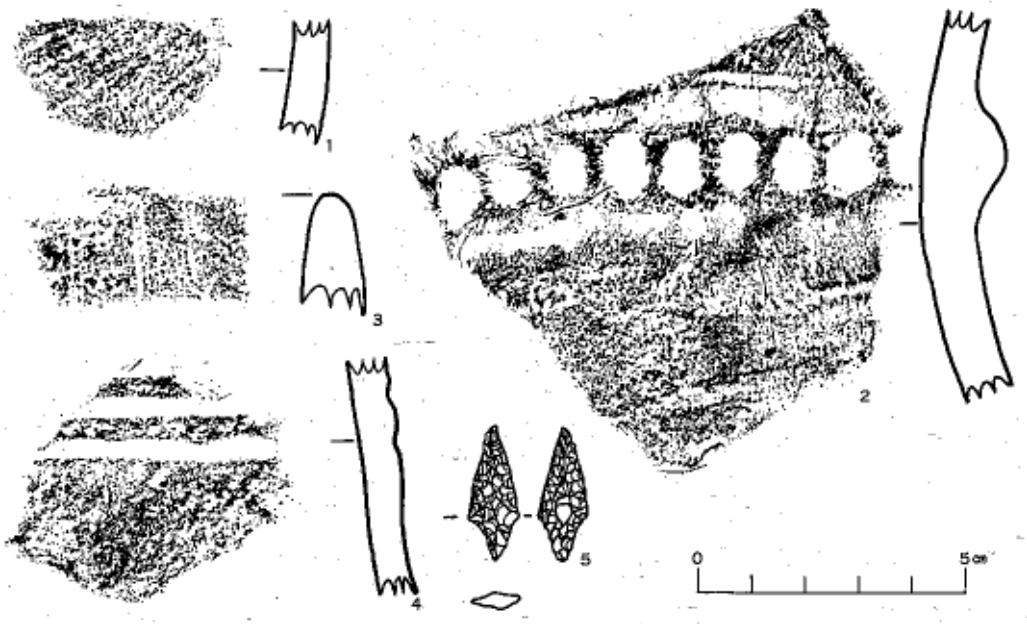
発掘面積に比べて出土遺物は非常に少ない。

＜土器＞

縄文土器片９点，土師器片14点，赤焼土器片１点と合わせて24点である。いずれも小破片であり，摩減がはげしく実測図を作成できたものはない。わずかに縄文土器数点を拓影で示した。縄文土器は，厚さ0.6㎝～1.3㎝で器表面の色調は暗褐色である。これらの中には口縁部２点，体部７点がある。そのうち，口縁部には条線があるもの１点（３），無文のもの１点，体部には左右から突き掻いて刻目を加えたもの１点（２），この同一個体と思われるものが２点ある。このほかには斜行縄文（ＬＲ）を施し沈線をめぐらしたもの１点（４），縄文だけのもの１点（１），不明なもの１点とある。この中で年代が判明するものは４だけで，縄文中期中葉のものと思われる。

土師器には坏４点，甕８点，器種不明２点がある。小破片で摩減がはげしく器形，調整の不明なものが多い。坏の中にはロクロ調整のものが１点含まれる。甕には体部外面にヘラミガキ，内面にナデ調整のあるものが２点，底部に回転糸切痕をもつものが１点含まれる。これらの年代は，ロクロ使用のものは平安時代，その他のものは不明である。

赤焼土器は，坏の口縁部破片で内外面にロクロ調整痕が見られる。年代はロクロ使用の痕跡からみて平安時代以後のものと考えられる。



第５図　土器拓影・石器実測図

<石鏃>

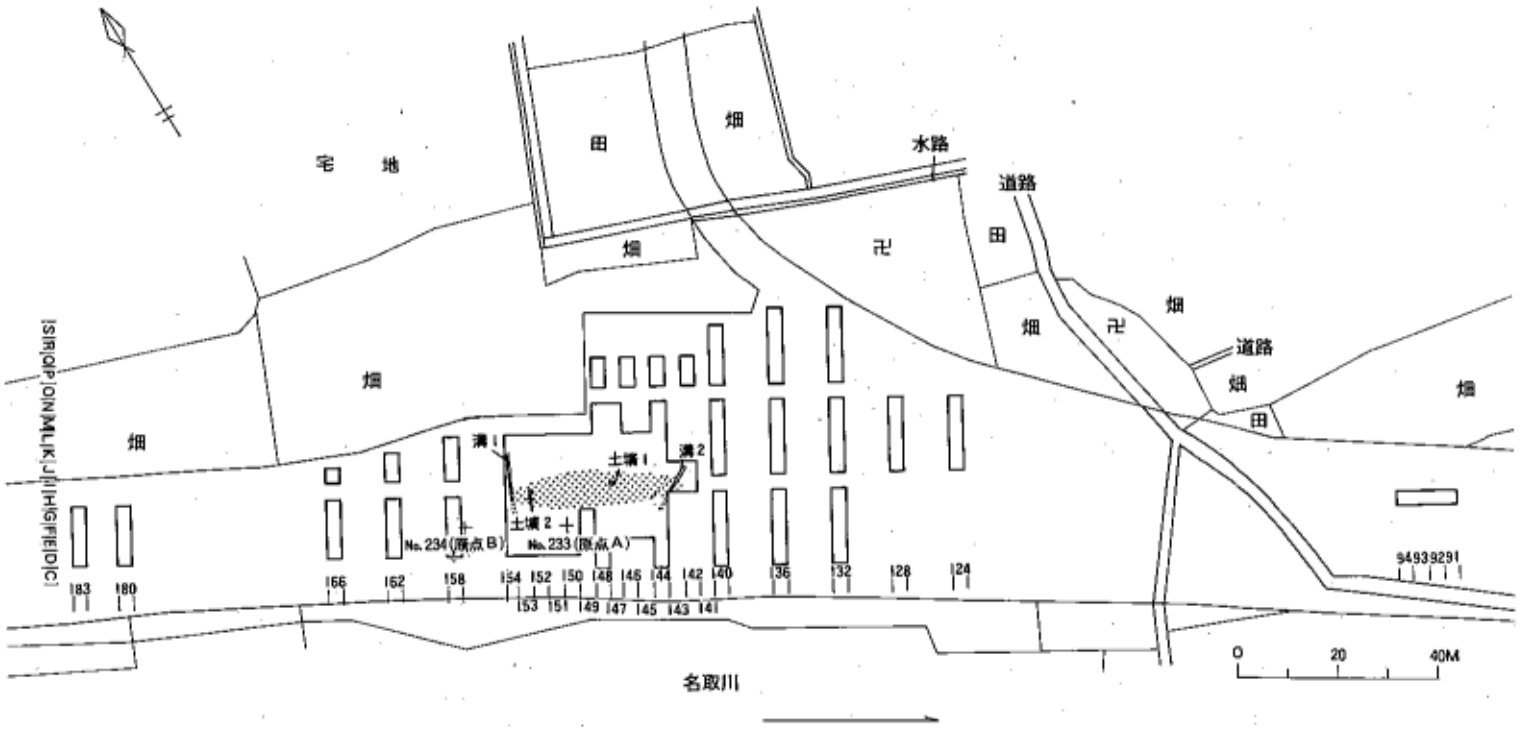
全面入念な調整剥離が加えられた有茎の石鏃が一点出土している。尖頭部の側縁は直線的で，その開き角は小さくするどい。基部は浅い調整剥離を加えてつくり出している。長さ2.6cm，幅1.0cm，厚さ0.3cm，重さ0.35gである。石材は頁岩である。所属時期は不明である。

Ⅱ　ま　と　め

調査の結果は，縄文時代，平安時代の遺物が少量出土した。今回の調査では遺構は検出されなかったが，周辺にこれらの遺物に関連する遺構の存在が考えられる。

写真３　清太原西遺跡発掘調査後の状況（北側より）

船渡前遺跡発掘調査概報
ふなとまえ


宅地
田
畑
水路
道路
畑
田
畑
畑
畑
畑
畑
畑
畑
畑
畑
田
畑
田
畑
畑
畑
畑
畑
畑
畑
畑
畑

Ⅰ 調 査 の 内 容

１　調査の方法と経過

１）調査区の設定

路線中心杭№233（原点Ａ）と同№234（原点Ｂ）を結ぶ線を基準とし，それに直交する線を設け，遺跡全体に３㎜単位のグリッドを組んだ。そして，原点Ａを基準として，その東側を150区，西側を151区，南側をＥ区，北側をＦ区とし，それを延長してそれぞれグリッド名を付した。

２）発掘の方法と経過

発掘の方法としては，５グリッドを単位としたトレンチを３列おきに設定し，遺跡の範囲，遺構の分布状況などを検討した。その結果，遺構としては溝状遺構，またＦ～Ｉ－143～154区の第２層で弥生時代の遺物が多量に発見された。

そこで，Ｆ～Ｉ－143～154区周辺を全面発掘することにした。また，微高地平担面から緩斜面にわずかに移行する部分で，第２層分布範囲の北側は住居跡などの遺構の存在が予想されたため，１列おきにトレンチを設定して，遺構の有無を検討した。

精査の結果，第２層が弥生時代中期の遺物を多量に含む層，第３層が縄文時代中・後期の遺物を含む層であることが確認された。また，微高地緩斜面で土壙が２基検出された。しかし，微高地平坦面から緩斜面に移行する部分では遺構は検出されなかった。

３）実測図の作成

発掘した範囲については，1/300の平面図を作成した。発見された遺構については$^{1}/_{20}$の平面図・断面図を作成した。第２層から出土した石器については，$^{1}/_{100}$の平面図にその出土地点を記入した。また，第２層が形成される以前の微地形を把握するために，第２層を掘り下げた後に$^{1}/_{100}$の平面図にレベルを記入した。発掘したトレンチの主なものについては，層の堆積状況を把握するために$^{1}/_{20}$の断面図を作成した。

２．調査の概要

１）基本層序（第８図）

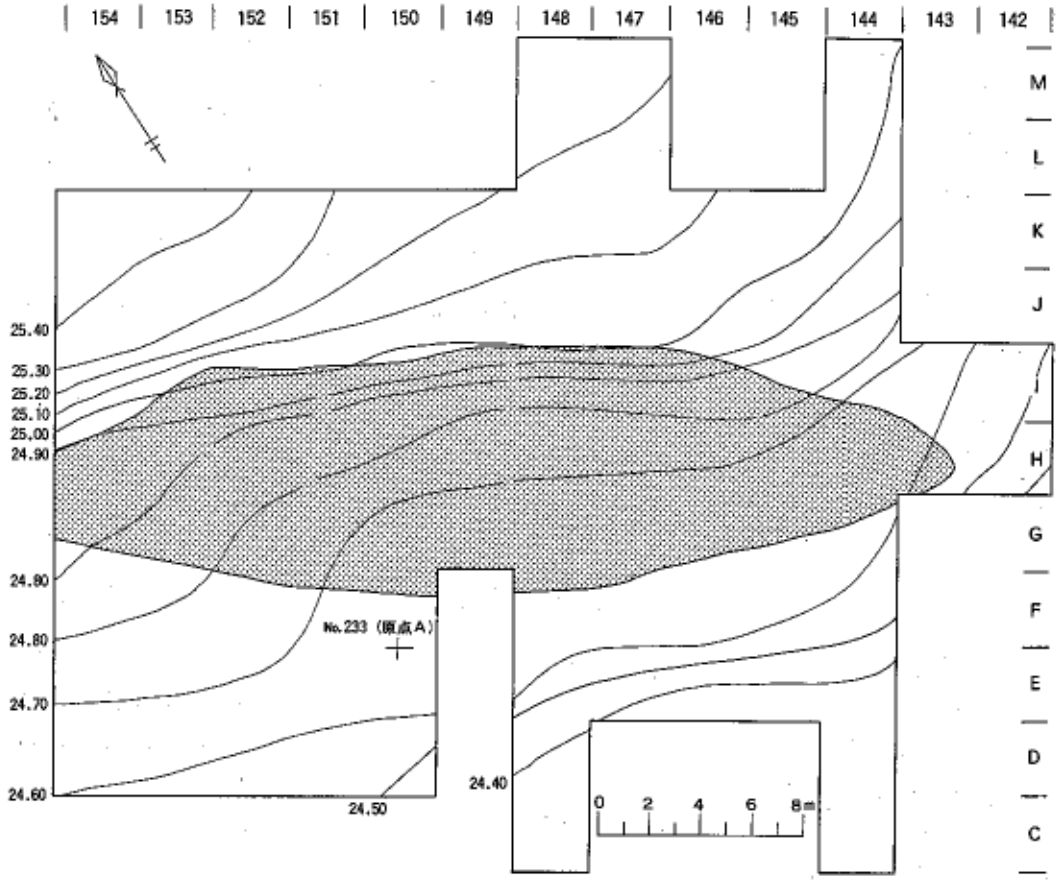
場所によって部分的な違いはあるが，遺跡の層序は次のようである。

第１層　表土層（畑地による耕作土）である。

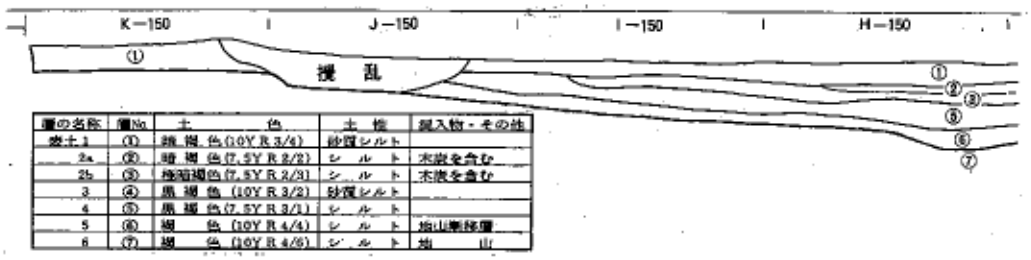
第２層　木炭を含むシルト層である。所によっては耕作によるウネの凹凸がある。全般には攪乱が少なく保存状態が良好である。第２層は微高地の南側緩斜面の凹地に堆積している。東西に長い楕円形の広がりをもつ層で，Ｈ－150区を中心に約200㎡の範囲に分布している。第２

層はわずかな土色の違いから２ａ層（黒褐色），２ｂ層（極暗褐色）に細分された。２ａ・２ｂ層はしまりぐあい・粒度・吸湿性・礫の混入度等の観察から短時間に堆積したものと考えられる。第２層は弥生時代中期の遺物を多量に含む層である。これらの遺物は層理面に対して不規則な状態で出土している。

第３層，黒褐色砂質シルト層で第２層と類似するが，粘質性が少なく木炭を含まない。調査区の南半分（C～G区）に堆積している。微量の縄文中・後期の土器が層理面に対して不規則な状態で出土した。



第７図　第２層の分布範囲と地形



層の名称	層No	土　色	土　性	混入物・その他
表土１	①	褐　色（10Y R 3/4）	砂質シルト	
2a	②	暗　褐　色（7.5Y R 2/2）	シ　ル　ト	木炭を含む
2b	③	極暗褐色（7.5Y R 2/3）	シ　ル　ト	木炭を含む
3	④	黒　褐　色（10Y R 3/2）	砂質シルト	
4	⑤	黒　褐　色（7.5Y R 3/1）	シ　ル　ト	
5	⑥	褐　色（10Y R 4/4）	シ　ル　ト	地山崩落層
6	⑦	褐　色（10Y R 4/6）	シ　ル　ト	地　山

第８図　D－150～K150区　東壁断面図

第４層　黒褐色シルト層である。遺物は含まない。

第５層　褐色シルト層である。遺物は含まない。

第６層　褐色シルト層である。第６層上面は北から南へゆるやかに傾斜していた。第６層上面よりさらに約50㎝掘り下げたが，遺物・遺構の確認はできなかった。この層はさらに下部へ続く。

２）遺構

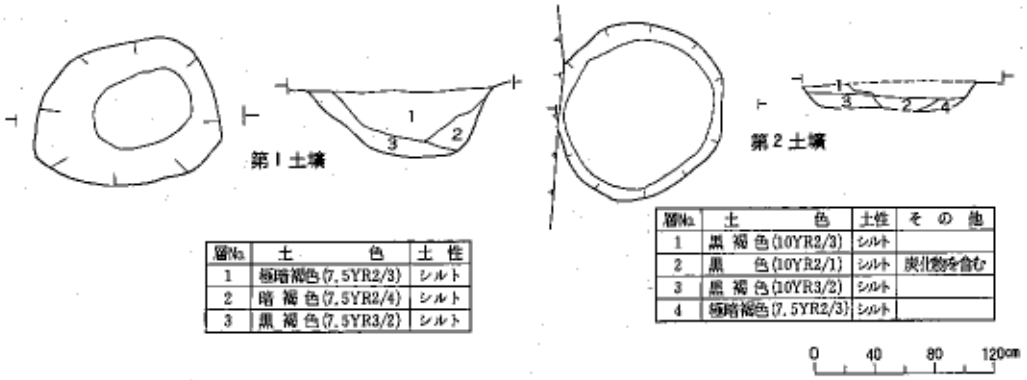
＜土壙＞（第９図）

土壙１

微高地緩斜面の第３層上面で確認された。平面形は長軸1.3m・短軸0.95mの楕円形で，深さ45㎝である。堆積土は３層に分けられ，遺物の出土はない。

土壙２

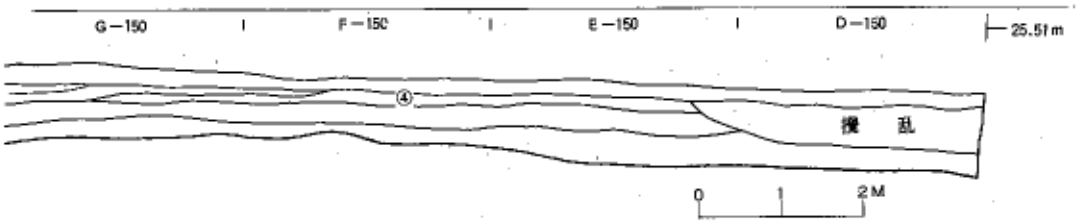
微高地の平坦面から緩斜面にわずかに移行した第２層で確認された。平面形は長軸1.2m・短軸1.1mのほぼ円形で，深さ20㎝である。堆積土は４層に分けられる。土壙のほぼ中央の２層上面で列点文が施された甕形土器が出土した。



層No.	土色	土性
1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト
2	暗褐色(7.5YR2/4)	シルト
3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト

層No.	土色	土性	その他
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	
2	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物を含む
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
4	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	

第９図　土壙実測図



＜溝＞

微高地緩斜面の東と西の第２層上面で２本の溝が確認された。いずれも溝の両端は削平のため不明である。

溝１（第10図）

上端の幅は30～40cm，下端の幅は15～30cm，深さ10cmで，全長約12m検出された。断面形は「U」字形である。堆積土は２層に分けられた。１層上面には径10～30cmの自然礫が多量にのっていた。

溝２

上端の幅は50cm，下端の幅は30cm，深さ８～10cmで，長さ約６m検出された。断面形は「U」字形である。堆積土は単層である。

第10図　溝Ｉ実測図

1層 暗褐色 (7.5YR 3／3) シルト
2層 極暗褐色 (7.5YR 2／3) シルト

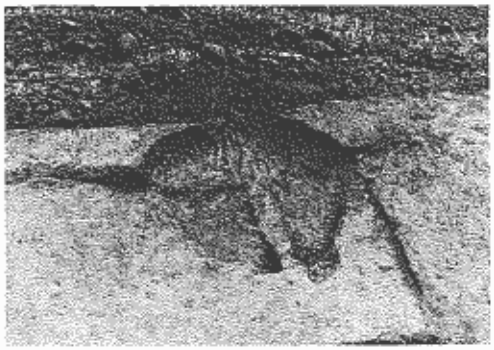


写真４　土壌２（西側より）

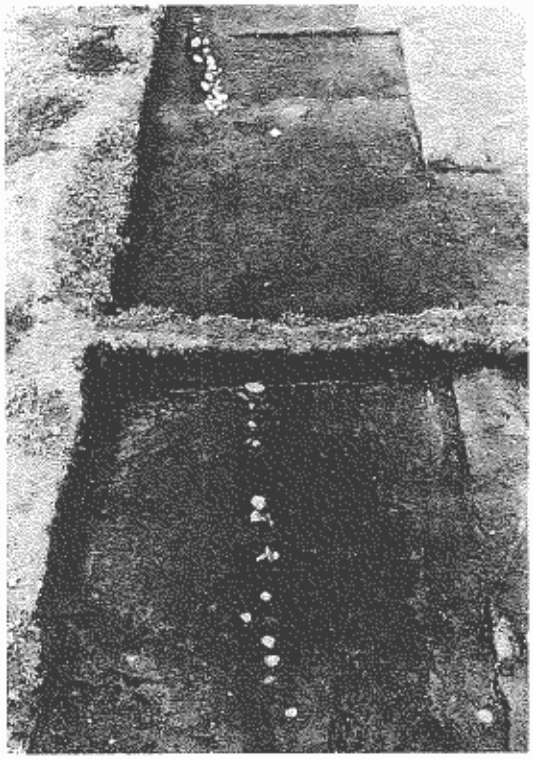


写真５　溝Ｉ（南側より）

3）出土遺物

＜土器＞

本遺跡からの出土土器は，大部分が弥生土器であり，縄文土器は数点出土しているにすぎない。

縄文土器（第11図１～４）

弥生土器に混って，第２層から数点出土した。第３層から出土したものもある。その量は僅かである。図示したものは完形に近いもの１点，体部破片３点である。１には沈線による縦位楕円文がある。２・３は隆起線による渦巻文が描かれている。４には残存部上端に粗い一例の刻目のある隆帯がめぐる。体部には縄文（ＬＲ）を地文とした，沈線による「Ｐ」字状文が点対称に描かれている。

弥生土器

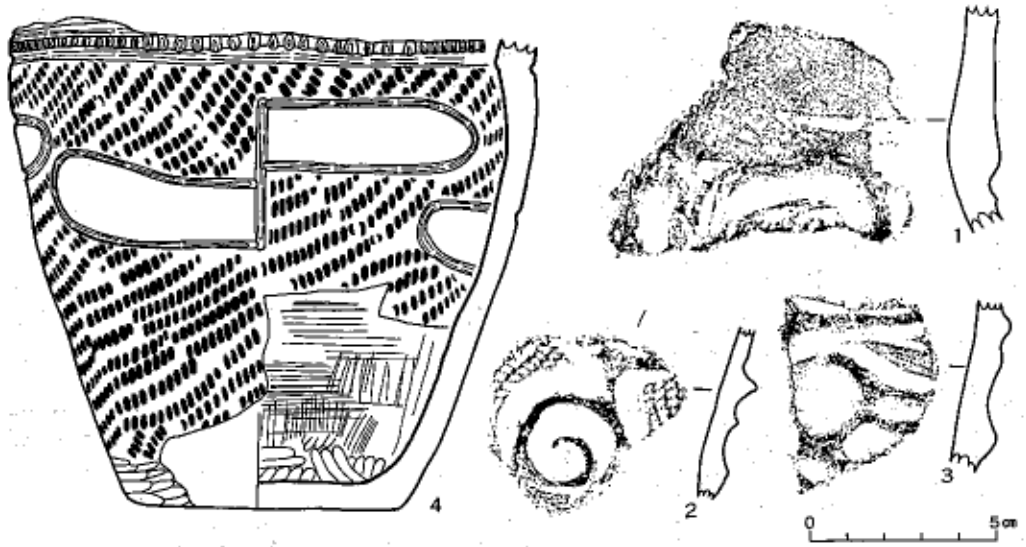
微高地緩斜面の第１層（耕作土）第２層（極暗褐色土）および土壙２などから多量に出土した。これらの土器は摩減がはげしく，ほとんどは細片で器形を推定することのできる完形土器もしくは大形破片は，些少であった。

これらの土器の大まかな特徴は次の通りである。

胎土：器面あるいは断面を観察すると，径1.0㎜～0.2㎜程度の縁辺の摩減した粗砂粒の混入した土器が多い。

色調：外面の色調はバラエティに富み，にぶい橙・明褐色・黄褐色・にぶい褐色・黒褐色・明赤褐色・赤褐色・暗赤褐色などが多い。黒褐色などの土器で，体部下半が赤褐色をしているものは，製作工程時の焼成痕のものか，使用時のものか不明であった。

成形：ほとんどの土器は内外面ともに器面調整が行なわれている。したがって土器製作工程



第11図　縄文土器拓影・実測図

の初期段階は十分に観察することはできなかった。わずかに土器底部の剥脱した部分の観察から，底部の接合は，底部となる円形土板に体部を内側にのせているものが認められた。

器面調整：内面の調整をみると，口縁部，体部ともに横位のミガキが施されているものが多い。外面の調整においては，口縁部をヨコナデしたもの，口縁部もしくは体部まで磨いているものもある。底部内面調整には，ミガキのあるものと，接合の際のナデツケやケズリの痕跡をもつものがある。

器形：完形土器および大形破片は少なく，本遺跡出土土器で全体の器形を知り得る資料は不足している。したがってここでは口縁部と底部の形態について述べる。口縁部形態には次のようなものがある。内彎するもの，直立するもの，外傾するもの，外反するもの。底部形態には平底と台付のものがある。

分類：第２層出土土器の口縁部資料について観察し，文様表現の類似性と口縁部形態を中心に分類を行なった。その中で特徴の明瞭なものについて図示し説明を加えた。

A　文様が平行沈線文で地文が無文（ミガキ）のものを一括した。

①　２～４条の平行沈線文が口縁と平行にめぐるものである（第12図１～11）。

ａ（１～７）：平縁で外傾するもの。１～５は口縁部が体部へ直線的に移行し，６，７は頸部が直立している。１，２は外面のみに沈線文がみられるが，３～７は口縁部内面にも，１条の沈線文がめぐらされている。１の沈線はほかのものに比べて比較的細い。

ｂ（８・９）：平縁で外反するもの。口縁部は短く，頸部はくびれて屈曲し，体部下半に向って強くすぼまる。口縁部内面に１条の沈線がめぐる。

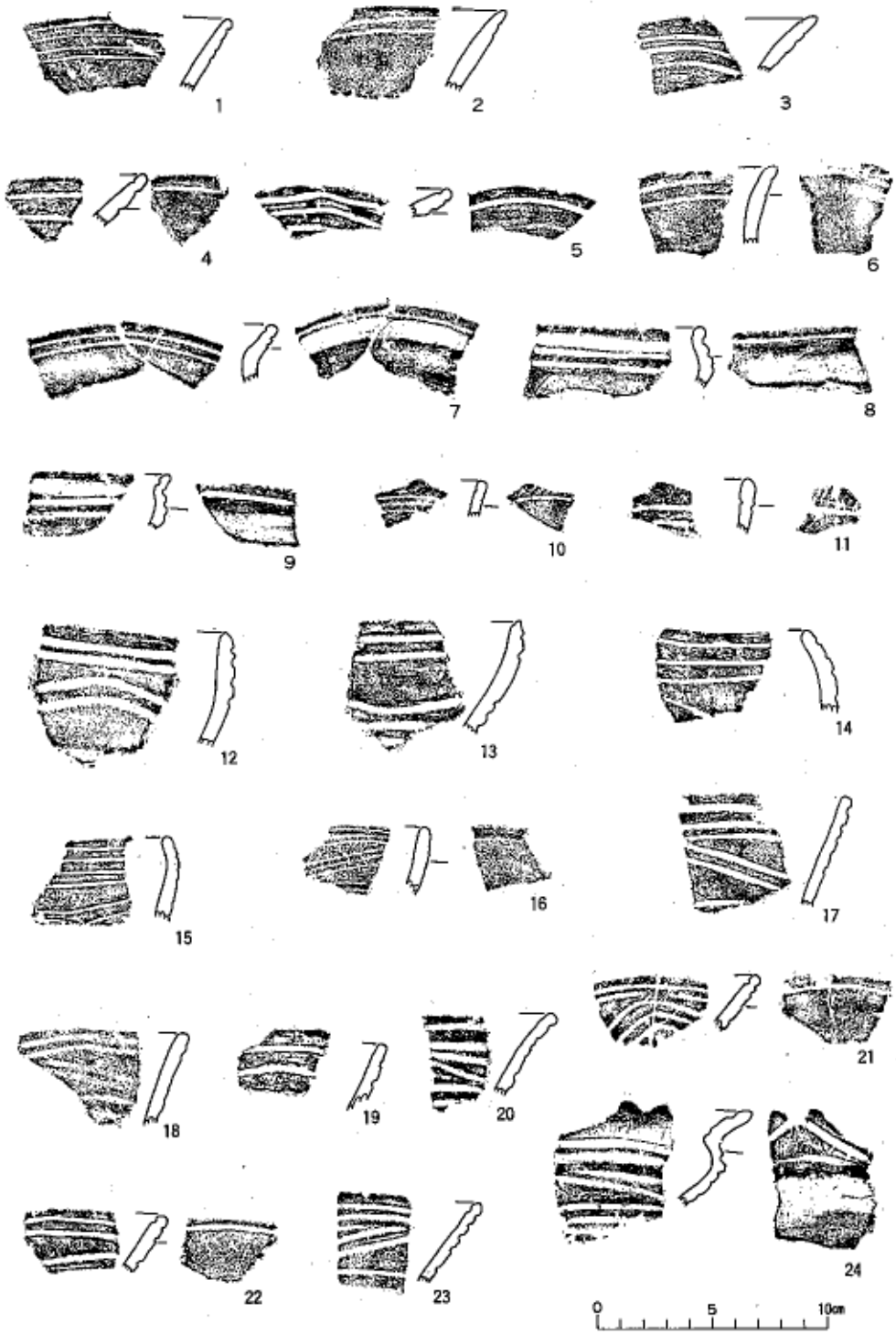
ｃ（10・11）：口縁部に小突起をもつもの。小破片のため，全体の突起数は不明である。口縁部内面に１条の沈線を施し，その沈線の上部に縄文施文をしている。11は突起内側の中央部に刻目を加えている。

②　２～４条の平行沈線が口縁と平行にめぐり，その下部に斜行沈線文が施されているものである（第12図12～24）。

ａ（12～16）：平縁で内彎するもの。12，13の斜行沈線文は横位の波状文になると思われるが，小破片のため全体の文様については不明である。16は口縁部内面に１条の細い沈線がめぐり，外面の沈線には朱彩の痕跡が認められる。

ｂ（17～23）：平縁で外傾するもの。17～20は外面にのみ沈線文がみられるが，21と22は口縁部内面に１条の沈線のめぐるものである。

ｃ（24）：口縁部に突起をもつもの。小破片のため波状突起の数は不明である。突起は外反する山形のもので，頂部が二叉に分れる。頸部はくびれ，肩が強く張り出している。突起の内面にみられる沈線の区画内に斜行縄文（ＬＲ）が施文されている。

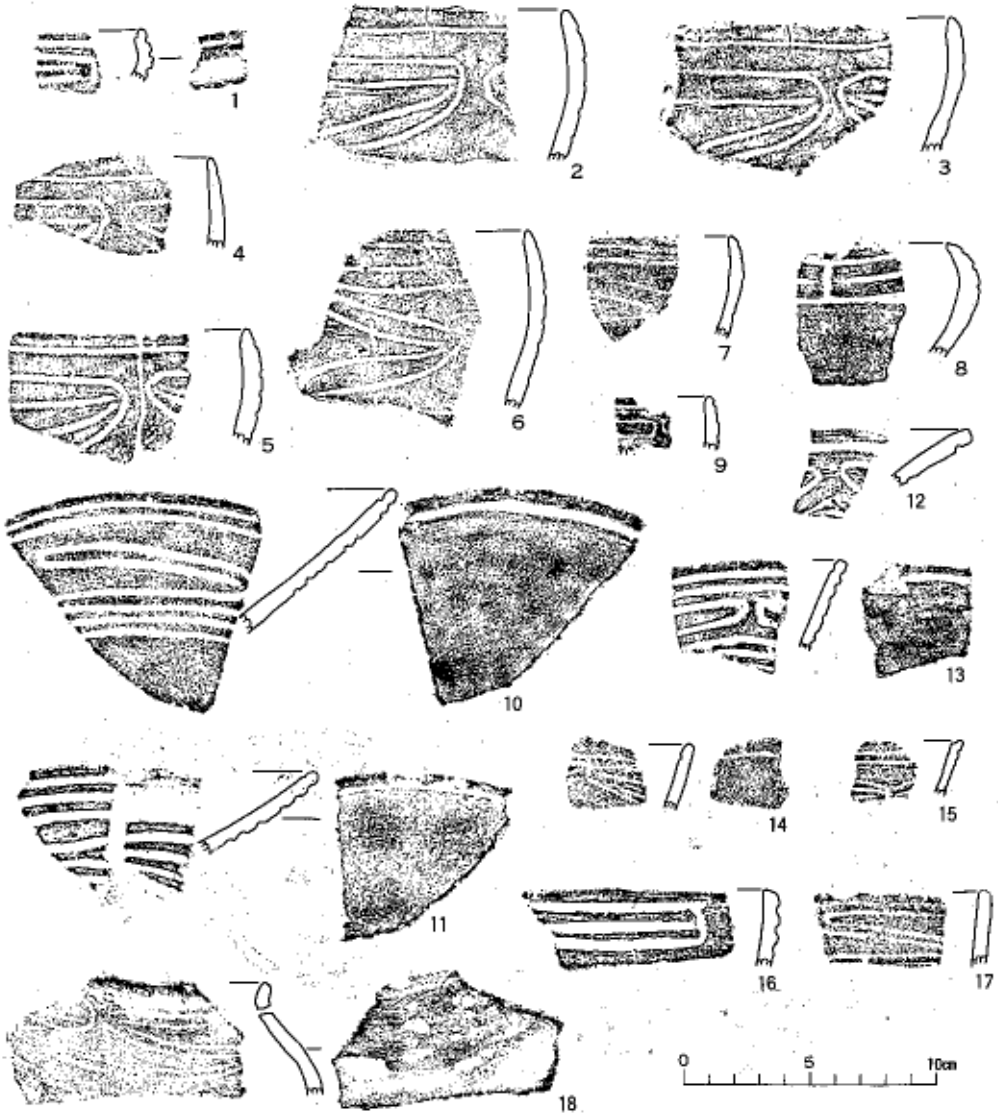


第12図　土器拓影　A－①－a（1－7）・A－①－b（8.9）・A－①－c（10.11）
A－②－a（12－16）・A－②－b（17～23）・A－②－c（24）

③　変形工字文に類似するものである（第13図１～18）。

ａ（１～９）：平縁で内彎するもの。１は小破片であるが，その外面には変形工字文と思われる文様が施され，結節部にボタン状の瘤をもつ。内面の口縁部上端には１条の沈線がめぐらされている。内外面の沈線には朱彩の痕跡が認められる。２～６は同一個体と考えられるが接合できなかった。９は他の土器と比較して，浅く細い沈線であり，器厚も薄手であり，小形の土器の破片であろう。

ｂ（10～13・16・17）：平縁で外傾するもの。10，11，13は口縁部内面に１条の沈線をめぐらす。



第13図　土器拓影　A－③－a（1～9）・A－③－b（10～13，16，17）
A－③－c（18）　・A－③－d（14，15）

ｃ（18）：平縁で外反するもの。口縁部は短く，頸部がくびれ，体部へ移行するにしたがって大きく膨む。頸部のくびれには貫通孔が観察される。

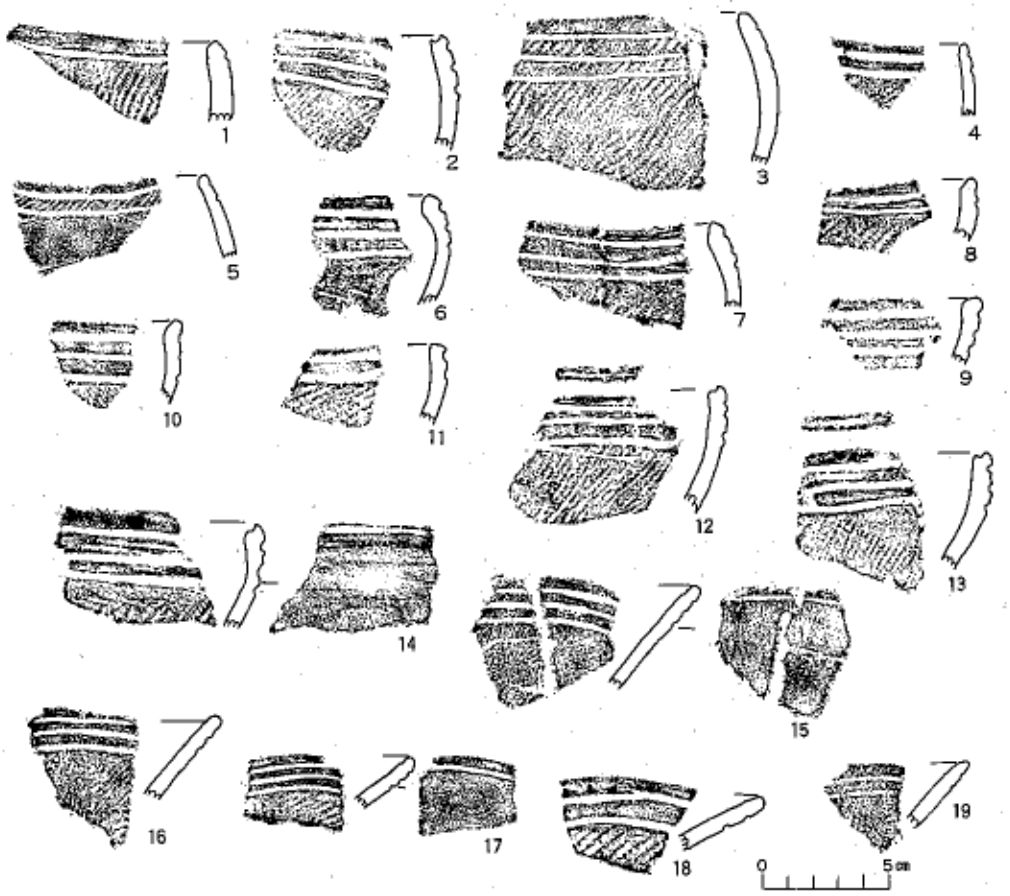
ｄ（14・15）：小波状口縁のもの。14の波頂部には刻目を添加している。変形工字文の結節部は縦位の刻みがある。内面に１条の沈線がめぐらされている。15は14と同一個体と思われる。

Ｂ　文様が区画沈線で，地文が縄文部と無文部（ミガキ）からなるものを一括した。

①　１～数条の区画沈線文が口縁と平行にみられるものである（第14図１～19・第15図１～11）。

ａ（１～14）：平縁で内彎するもの。地文としての縄文はＬＲが多いが，11の無節撚糸文や12の異常斜文がみられる。１，２，４，７～14は区画内がすべて無文であるが，３，５，６は区画内の一部に縄文がみられる。２，12～14は口唇部に１条の沈線が施されている。

ｂ（15～19）：平縁で外傾するもの。地文としての縄文はＬＲが多い。15～18は区画内がすべて無文であるが，19は区画内にも縄文がみられる。15～17の口縁部内面には１条の沈線がめ



第14図　土器拓影　Ｂ－①－ａ（１～14）・Ｂ－①－ｂ（15～19）

ぐらされている。17は外面の沈線内に朱彩の痕跡が認められる。

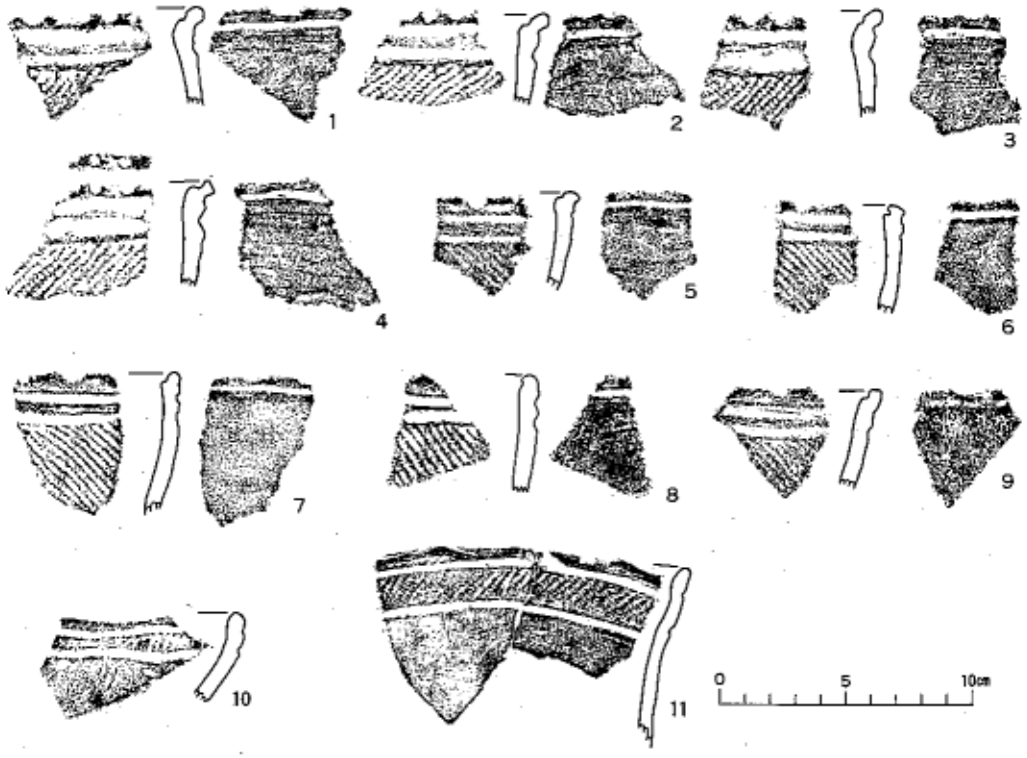
ｃ（第15図１～11）：小波状口縁のもの。１～９は波長部の間隔が狭く，10，11は広い。また１～５は口縁部が外反し，６～11は直立する。地文としての縄文はＬＲのほかにＲＬのものもある。１～９は区画内が無文であり，内面に１条の沈線がめぐる。10，11は区画内にも縄文がみられ，内面には沈線がない。

② 口縁に対し，平行および斜行する区画沈線文がみられるものである（第16図１～24）。

ａ（１～16）：平縁でかるい膨みをもって内彎するもの。１，２は同一個体と思われる。口縁に平行する区画文と斜行する区画文を交互に配し，縄文部と無文部をつくっている。無文部は三角状文を形成している。また、３のように縄文部が三角文を形成しているものもある。この他のものは同様な区画文をもつか，三角文を形成するかどうかは不明である。８は口縁部内面に沈線をめぐらし，朱彩の痕跡も認められる。15には焼成後の貫通孔が認められる。１～３，６の内外面には少量の炭化物が付着している。

ｂ（17～23）：平縁で外傾するもの。文様はａに類似するものである。17～23は口縁部内面に１条の沈線がめぐる。その中で20は口縁部内面に縄文を施文している。

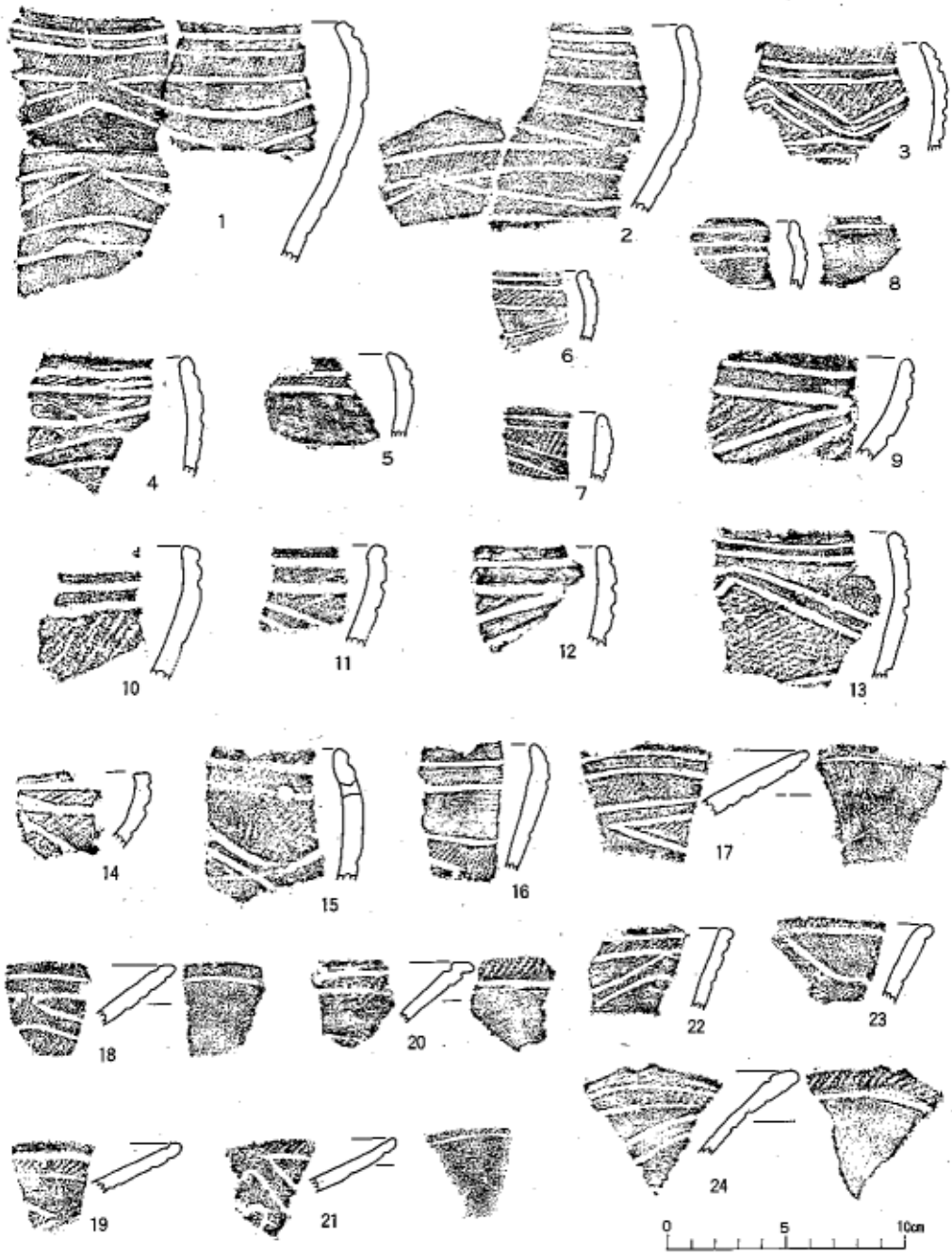
ｃ（24）：口縁部に小突起をもつもの。小破片のため全体の突起数は不明である。突起の頂



第15図　土器拓影　B－①－ｃ（1～11）

部は二叉に分れている。口縁部形態は外傾するものである。口縁部内面に１条の沈線を施し，その上部に縄文を施文している。

③　２～数条の区画沈線文が口縁と平行にみられ，地文の縄文部と無文部が交互に配されて



第16図　土器拓影　B－②－a（1～16）・B－②－b（17～23）・B－②－c（24）

いるものである（第17図１～５）。

ａ（１）：平縁で外反するもの。外反部分の下に膨みをもつ。

ｂ（２）：平縁で外傾するもの。口縁部内面に１条の沈線をめぐらす。

ｃ（４・５）：平縁で内彎するもの。

ｄ（３）：小波状で口縁が外反するもの。口縁部内面には１条の沈線がめぐり，その上部に縄文が施文されている。

④　口縁に平行，斜行，縦位の区画沈線文がみられるものである（第17図６～10）。

ａ（６～９）：平縁で内彎するもの。６～８の内外面に炭化物が付着している。

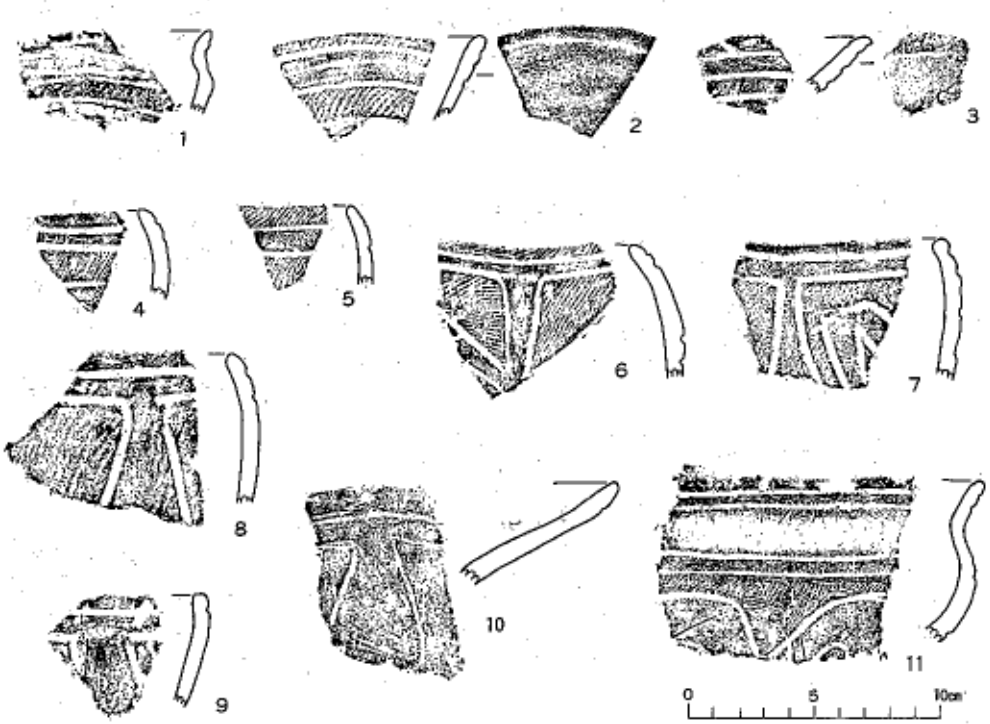
ｂ（10）：平縁で外傾するもの。

⑤　口縁に平行な区画線文と，曲線区画沈線文がみられるものである（第17図11）。

平縁で外反し，体部上半に膨みをもつ。口縁部内面の上端に１条の沈線がめぐる。

Ｃ　文様が列点文で，地文が無文（ヨコナデ）と縄文のものを一括した（第18図１～11）。

平縁で口縁部が外反し，頸部で屈曲し体部上半で膨みをもつ。１～３は強く外反し，４～11はわずかに外反する。体部上端に突き120掻いた列点文がある。その形状をみると１～４，６～８は円形または楕円形で，５，９，10は扁平である。列点の周縁の胎土状態を観察すると，１～

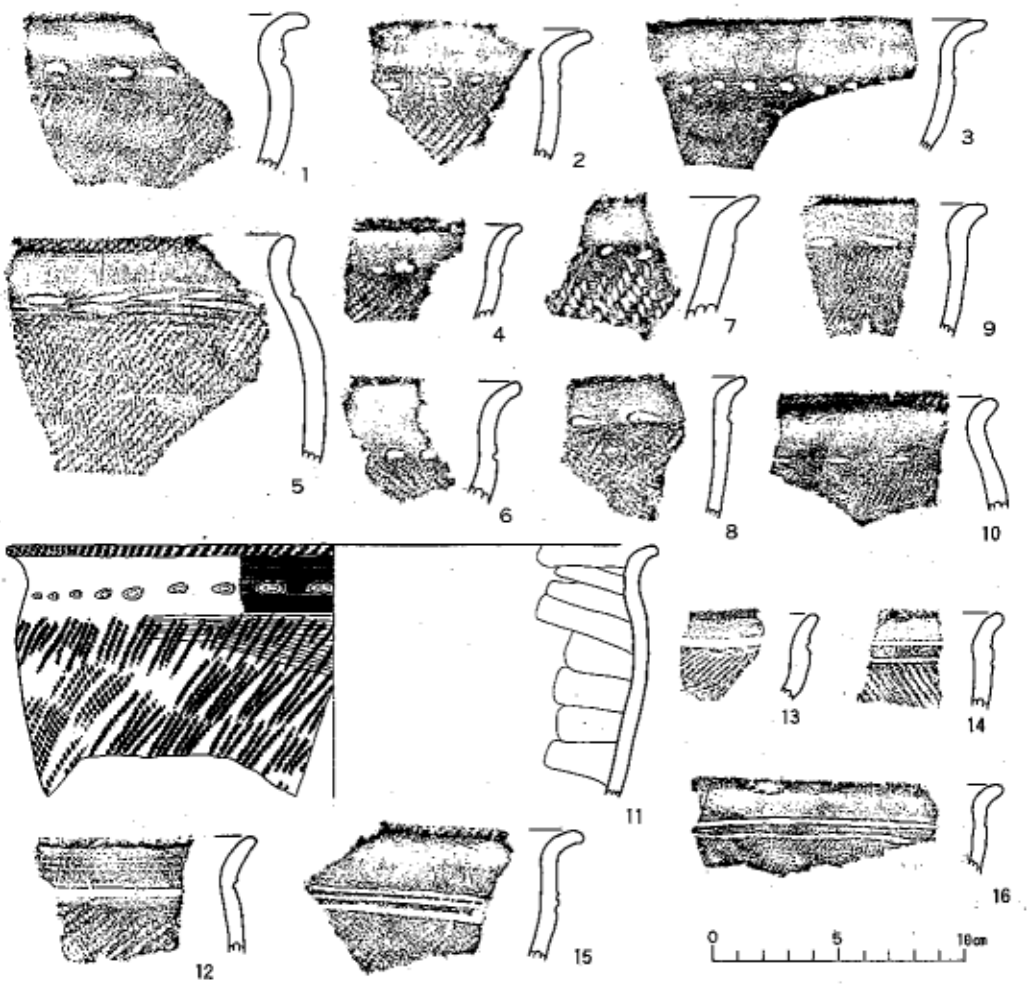


第17図　土器拓影　B－③－a（1）・B－③－b（2）・B－③－c（4，5）B－③－d（3）・B－④－a（6～9）・B－④－b（10）B－⑤（11）

４，９は右側縁に，６～８が左側縁に，５は上下縁に盛り上りがみられる。10はほとんど盛り上りがみられない。大部分のものは口唇部に縄文が施されているが，３のように無文のものもある。地文の縄文はＬＲがほとんどであるが，６はＲＬである。11は土壙２から出土した土器で，器形の上半を観察することができる。口径は25.8㎝で器高は不明である。頸部付近の器面調整，列点施文の手順は，刷毛目→縄文施文（ＬＲ＋Ｒ）→ヨコナデ→列点文となる。外面に炭化物の付着が認められる。

Ｄ　文様は口縁に平行な１～３条の沈線文で，地文は無文（ヨコナデ）と縄文のものを一括した（第18図12～16）。

平縁で口縁部が外反するものである。14，15には口唇部に縄文を施している。地文の縄文はＬＲが多いが，14はＲＬである。



第18図　土器拓影・実測図　C（1～11）・D（12～16）

Ｅ　文様がなく，地文が無文（ヨコナデ）と縄文のものを一括した（第19図１～９）。

ａ（１～７）：平縁で外反するもの。１～４は口縁部が短く，５～７は口縁部が長い。前者は口唇部に縄文が施され，口頸部にヨコナデによる無文がある。後者は口唇部に縄文はなく，口頸部にミガキによる無文がある。１と５には外面に炭化物の着付がみられる。２は内外面にくっきりと朱彩の痕跡が認められる。

ｂ（８・９）：波状口縁のもので外反するもの。口頸部はヨコナデによる無文である。９は器形の上半を推定することのできる土器である。口縁部は外反し体部上半に膨みをもつ。波状の数は６個である。最大径は体部にある。口径は13.1㎝で器高は不明である。縄文施文後にヨコナデをしている。

Ｆ　文様はなく，地文は縄文のものを一括した（第19図10～16）。

ａ（10～15）：平縁で内彎するもの。15の口縁部内面には縄文が施されているが，他のものにはみられない。10，12，14，15は縄文が口縁にまで及んでいるが，13は口縁に達していない。

ｂ（16）：平縁で外傾するもの。口縁部内面に縄文が施されている。

Ｇ　文様はなく，地文が条線のものを一括した（第19図17～19）。

ａ（17・18）：平縁で内彎するもの。共に条線が縦位に施されている。17は条線が粗であり，18は密である。

ｂ（19）：平縁で外反するもの。条線は縦位に施され密である。

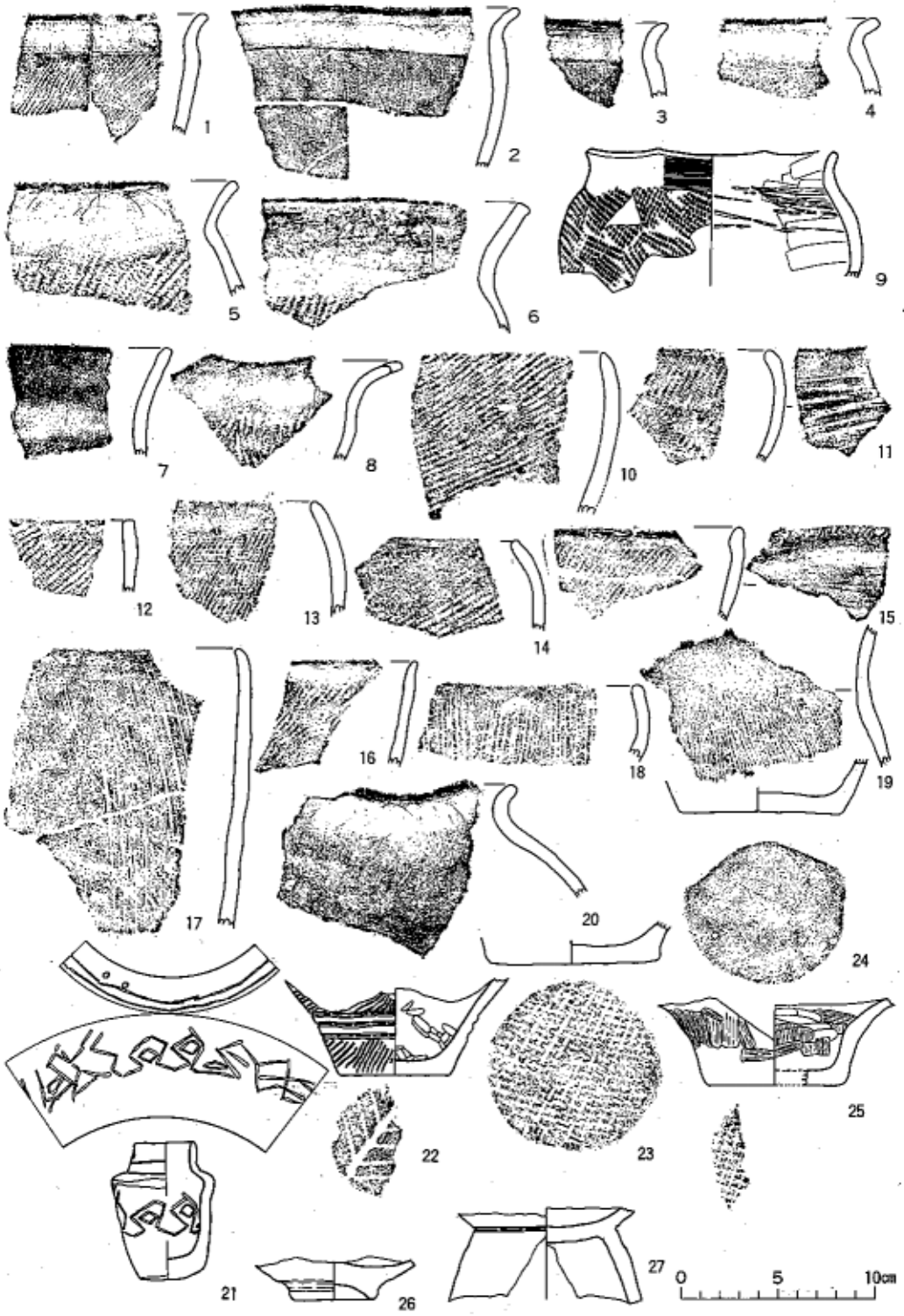
Ｈ　口縁部が外反し，無文のものである（第19図20）。

平縁で外反する短い口縁が，体部で大きく膨む。内外面に入念なミガキが加えられ，光沢をおびている。

Ｉ　特殊小形土器である（第19図21）

口縁部は平縁で内傾気味に直立する。頸部でくびれ肩が張り出す。体部は直立気味に外傾する。底部は丸底風の平底である。器厚は口縁部から体部へかけて厚みを増し，底部で最も厚く1.1㎝である。器高7.1㎝，最大径5.3㎝，口縁径3.1㎝，底部径3.2㎝。頸部にはとぎれがちな２条の沈線がめぐる。体部中央に細く短い単位の沈線を，つなぎ合わせて文様を描いている。見方によっては目と鼻を表現したかと思われる個所もある。体部には部分的に縄文が施文されている。口縁部には２個１対の貫通孔がある。

底部には平底と台付のものがある。平底のものは後者に比べて非常に多い。また，平底の外面を観察すると，第19図22には木葉痕，23，25には網代痕，24は無文である。木葉痕と網代痕の出土比率はほぼ同率であるが，無文は少ない。台付のものには，26のように台の低いものと27のように高いものがある。



第19図　土器拓影・実測図　E－a（1～7）・E－b（8，9）・F－a（10～15）・F－b（16）
G－a（17，18）・G－b（19）・H（20）・I（21）・底部（22～27）

＜石器＞

石器には剥片石器（石鏃・石匙・石錐・不定形石器）と礫石器（石斧・石庖丁・石皿・磨石・敲石・凹石・砥石・大形打石器）がある。その他に多量の石核や剥片も出土している。第２層からは，これらすべての種類の石器が出土しており，量的にも出土石器の大部分をしめている。したがって，ここでは第２層出土石器の主なものについて説明する。

石鏃（第20図）

全体的形態・基部形態・尖頭部形態を観察し，基部形態を基準としてＡ～Ｅに分類した。

Ａ．平基のものである（１）

正三角形に近く両面に調整剥離がなされている。

Ｂ．基部のえぐりこみが多少深く「Ｔ」字状の凸基のものを一括した。（２～７，12～32）

２～４・12～22は，長さに比べて身幅が広いものである。両側縁が直線的である。多くのものは入念な調整剥離が加えられているが，13・16・20・22は両面もしくは片面に一次剥離の痕跡を残している。４・15～17は比較的小形のものである。14は先端が欠損している。

５～７・23～32は長さに比べて身幅が狭いものである。５・23～30は両側縁が直線的である。７・32は両側縁がやや内彎し細身の先端部をしている。７・32は比較的厚い。６・31は両側縁がこころもちふくらむ。31は先端部が欠損している。

Ｃ．基部のえぐりこみが浅く「Ｙ」字状凸基のものを一括した（８・９・33～42）

８・33～38は長さに比べて身幅が広いものである。両側縁は直線的である。33～36・38は片面に一次剥離の痕跡を残している。８は基部にアスファルト状のものが付着している。

９・39～42は長さに比べて身幅の狭いものである。これらは比較的厚い。39～41は片面に一次剥離の痕跡を残している。

Ｄ．基部のえぐり込みがきわめて浅く「Ｖ」字状凸基のものを一括した。（10・43～47）

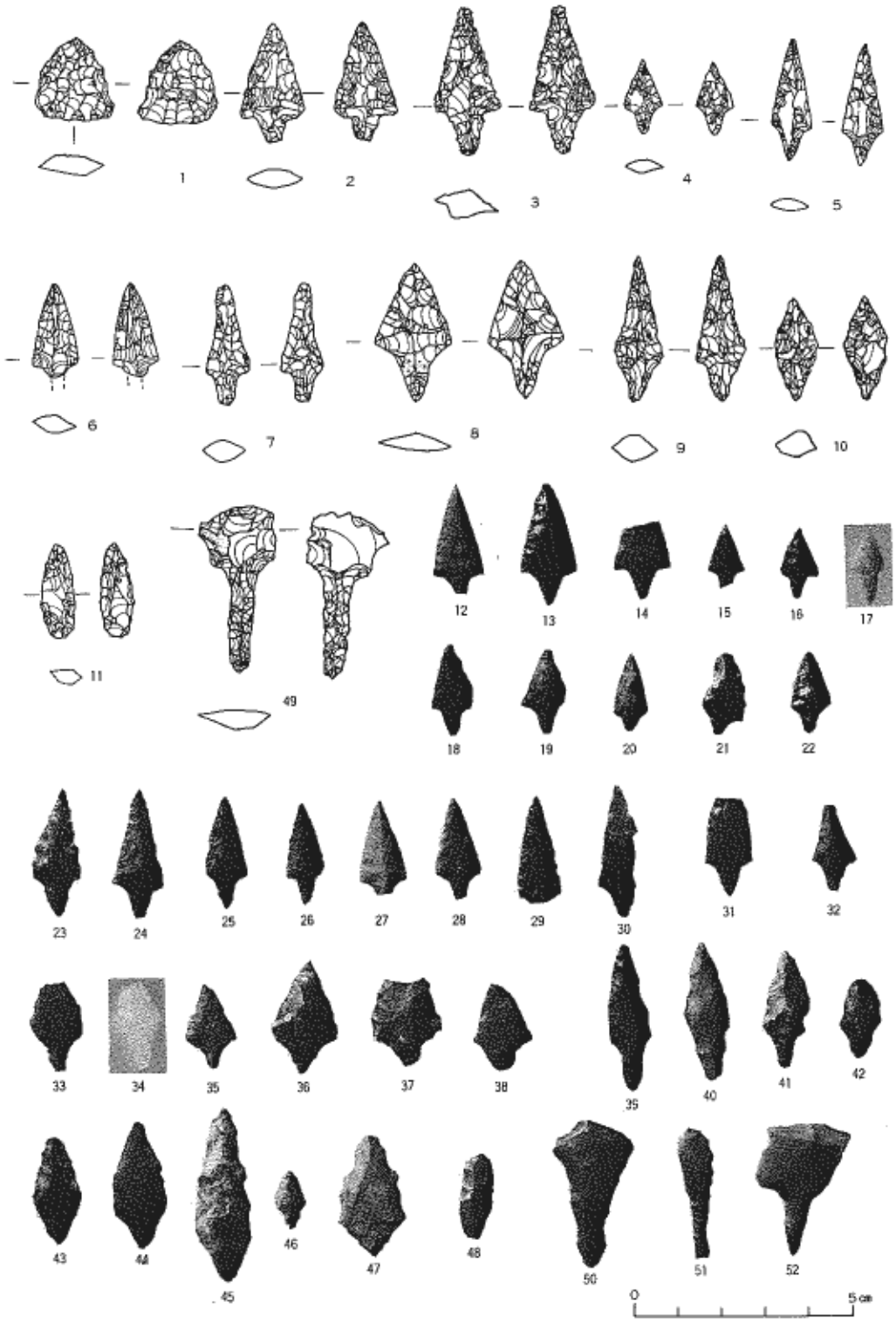
10・43・46は尖頭部と基部の長さがほぼ等しく，小形である。44・45・47は尖頭部に比べて基部の長さが短かく，大形である。43・44は片面に，47は両面に一次剥離の痕跡を残している。47は比較的うすい。

Ｅ．棒状基のものを一括した。（11・48）

両側縁はわずかにふくらみをもつ。11は両面に一次剥離の痕跡を残している。

石錐（第20図）

いずれもつまみ部と錐部からなる。49・52はつまみと錐部の区別が明瞭で錐部断面形は四角形である。つまみ部は，49では周縁全体に調整剥離が加えられているが，52にはみられない。50・51はつまみ部と錐部の区別が不明瞭で，錐部断面形は三角形である。つまみ部は，50の両側縁，51の側縁に調整剥離が加えられている。49の錐部下半側縁には顕著な摩耗痕が認められ

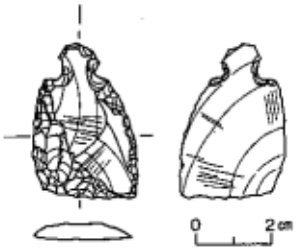


第20図　剥片石器　石鏃（1～48）・石錐（49－52）

る。50・51は錐部先端が欠損している。

石匙（第21図）

縦形石匙である。えぐりを入れてつまみ部と刃部をつくり出している。えぐりの部分は両面調整剥離がなされているが，つまみ部と刃部周縁の背面には調整剥離が加えられている。



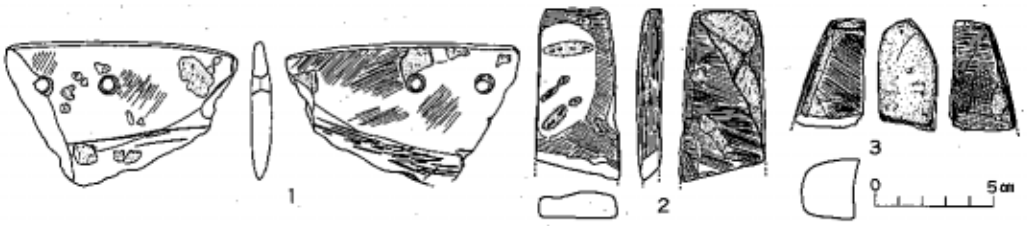
第21図　剝片石器

石斧（第22図２・３）

２は刃部を欠いている。平面形は頭部から胴部にわずかに開く短冊形である。横断面形は扁平な長方形である。縦断面形は上面がわずかにふくらむが，下面は平担である。器面には整形時の擦痕が顕著に観察される。刃部を欠いているが，形態的特徴から扁平片刃石斧と思われる。３は頭部破片と思われる。側面と上下面の境には明瞭な稜線が認められる。器面には整形時の擦痕がみられる。

石庖丁（第22図１）

約$^{1}/_{2}$が欠損しているが，半月形の石庖丁と思われる。背部はわずかにふくらみをもつ。刃部は強く外彎しており両刃である。孔は背部に近いところに２個認められ，いずれも両面から穿孔されている。器面は平担で，整形時の擦痕が斜めに走っている。また，刃部には横方向の線状痕が観察される。器面は全体に摩滅している。



第22図　礫石器　石庖丁（1）・石斧（2，3）

石皿（第23図７）

約$^{1}/_{2}$が欠損している。断面三角形の縁をもつ片口状のものである。底面はほぼ平担であり，底面中央から片口部分にかけて摩耗が観察される。特に片口の部分が顕著である。下面には脚が認められない。

磨石（第23図１）

円礫の一部に磨面と敲打痕をもつ。磨面には擦痕が観察される。

敲石（第23図２）

円礫の周縁の一部に敲打痕が認められる。

凹石（第23図３，４）

いずれも扁平な円礫の両面に数個のくぼみが認められる。３のくぼみは断面「V」字状で深

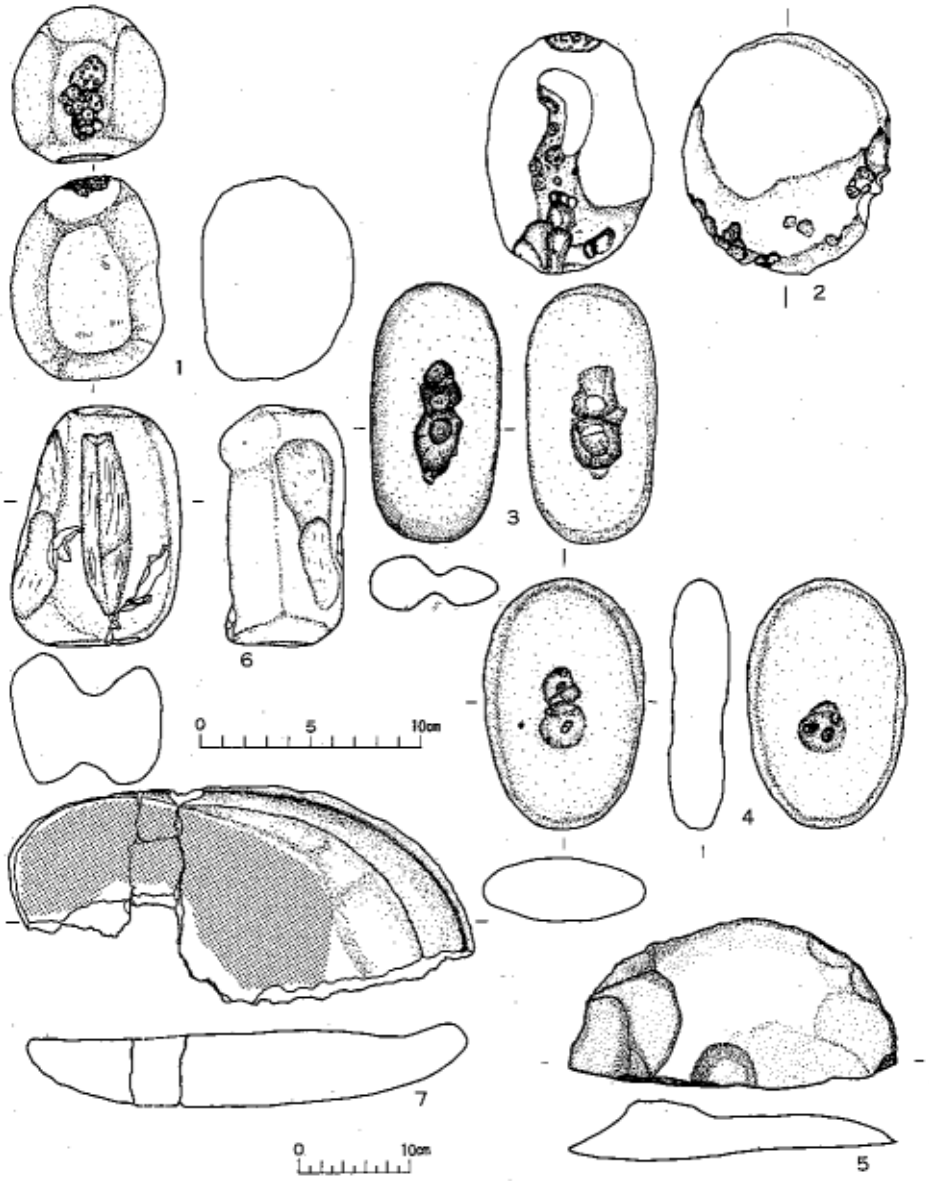
く，４は皿状で浅い。

砥石（第23図６）

表裏二面に断面「V」字状の溝状のくぼみがある。そのうちの一方には顕著な磨面が認められる。また，他の部分にも磨面の痕跡が認められる。

大形打石器（第23図５）

自然面をもつ扁平な剥片の周縁に調整剥離を加えたもので，自然面側に皿状のくぼみがある。



第23図　礫石器　石皿（7）・磨石（1）・敲石（2）・凹石（3，4）
砥石（6）・大形打石器（5）

Ⅱ 考　　察

以上，船渡前遺跡の調査内容について述べた。しかし，整理作業が完了しておらず，不明な部分も多い。したがって調査の成果については現時点における考察を行ないたい。

１．層の性格

本遺跡の，遺物を含む層である第２，第３層についてはほぼ完全に調査することができた。調査結果にもとづいて，各層の性格，成因などについて検討を加えたい。

第２層はH－150区を中心として東西に長い窪地に堆積し，その分布面積は約200㎡である。この層は２ａ，２ｂ層に細分されたが，層の特徴から基本的には同一層と認められた。遺物は層理面に対して不規則な状態で出土した。これらのことから第２層は二次堆積の可能性もあるが比較的短時間に一定の場所に堆積したものと思われる。したがって，この層から出土する遺物は時間的限定を与えることができる。

第３層は第２層と一部重複しながら南側に広く分布している。遺物は不規則な状態で出土した。しかし，遺物の出土量が非常に少なかったことなどから第３層の性格については十分明らかにすることができなかった。

２．遺構の性格

遺構としては，土壙と溝が発見されている。土壙としては内部から一括土器が出土したもの土壙２と，遺物のみられないもの土壙１があった。その性格については十分な検討を行なっていないので明らかにすることができない。しかし，土壙２に類似したものが福島県柏山，下高野遺跡で発見され，土壙墓と考えられている（伊東・須藤：1971．1972，目黒：1969）。したがって土壙２は確証はつかめなかったが，これらの例から土壙墓の可能性もある。

溝については保存状態が良好でなく，出土遺物のないことからその性格は不明である。

３．遺物について

〔縄文土器〕縦位楕円文と隆起線による渦巻文が施文された土器は山前遺跡や青島貝塚から出土し，縄文時代中期後半の土器と理解されている（小牛田町教委：1976，加藤・後藤：1975）。「P」字状文が描かれた土器は刻目のある隆帯がめぐること，特徴的な区画文のあり方から見ると岩手県貝鳥貝塚などに比較的類似したものがあり，それらは縄文時代後期中葉の土器と考えられている（草間・金子：1971）

〔弥生土器〕弥生土器はその出土量が多かったが，器形を十分に知り得るものは少なかった。そこで土器の特徴がよく現われる口縁部資料を中心として観察をし，分類を行なった。分類の方法は文様表現のあり方を基準とし，それらを口縁部形態などの相違によって細分するものであった。その結果をまとめると表のようになる。

群	文様表現	地文	細分	口縁部形態
A	平行沈線文	無文（ミガキ）	①. 口縁と平行な沈線	a. 平縁で外傾 b. 〃 外反 c. 小突起
			②. A−①＋体部に斜行沈線	a. 平縁で内容 b. 〃 外傾 c. 突起
			③. 変形工字文に類似	a. 平縁で内彎 b. 〃 外傾 c. 〃 外反 d. 小波状
B	区画沈線文	縄文と無文（ミガキ）	①. 口縁と平行な区画沈線文	a. 平縁で内彎 b. 〃 外傾 c. 小波状
			②. B−①＋斜行区画沈線文	a. 平縁で内彎 b. 〃 外傾 c. 小突起
			③. B−①＋縄文部と無文部の交互配置	a. 平縁で外反 b. 〃 外傾 c. 〃 内彎 d. 小波状
			④. B−②＋縦位区画沈線文	a. 平縁で内彎 b. 〃 外傾
			⑤. B−①＋曲線区画沈線文	平縁で外反
C	列点文	縄文と無文（ヨコナデ）		平縁で外反
D	平行沈線文	縄文と無文（ヨコナデ）		平縁で外反
E		縄文と無文（ヨコナデ ミガキ）		a. 平縁で外反 b. 波状
F		縄文		a. 平縁で内彎 b. 〃 外傾
G		条線		a. 平縁で内彎 b. 〃 外反
H		無文（ミガキ）		平縁で外反
I	沈線文	縄文と無文		直立

これらの土器はすべて第２層から出土したものである。すでに述べたように第２層の性格などから時間的に限定されるものと理解することができる。

次に，これらの資料と類似したものを出土する遺跡の例と比較してみたい。大泉遺跡・青木畑遺跡では**A．B**群が出土している（伊東：1957，興野：1976）。また山王遺跡第３層からは**A．B**群のほかに**E．F**群の土器が出土している（須藤：1973）。このほか寺下囲遺跡では**A．B．C．D．E**の土器群が出土している（加藤：1959，1968）。鱸沼遺跡では**A〜H**群の土器が出土している（志間：1971）。以上のことから**A．B．E**群については多くの遺跡においてその共伴関係が明瞭である。これに対して**C．D．F．G．H**群は各遺跡において一致した共伴関係は報告されていない。本遺跡では**A〜H**群が共伴しているが，**C．D．F．G．H**群についてはその共伴関係を示す類例が少ないため，今後さらに検討を加えていく必要がある。

これらの編年的位置づけについては，大泉，山王３層，青木畑，鱸沼遺跡では大泉式としている。また寺下囲貝塚では福浦島式もしくは寺下囲式としている。いずれも桝形図式に先行するものとして一致した見解を示している。なお伊藤玄三（伊藤：1966，1969）は特に**A．C**群を福浦島下層式，**B**群を棚倉式に細分している。

本遺跡ではこれまでに述べたようなことから，**A〜H**群土器を大泉式と呼んでおきたい。また**I**については，これらと共伴していることから同一型式に含まれるものと理解したい。

〔石器〕今回とりあげた石器群は第２層出土のものである。第２層からはすでに述べたように，弥生時代中期大泉式土器がまとまって出土している。したがって，これらの石器群は大泉式期のものと考えられる。

石器の種類には，石鏃・石錐・石匙・不定形石器・磨製石斧・石庖丁・石皿・磨石・敲石・凹石・砥石・大形打石器がある。特にその中で，石鏃の出土量が比較的多い。その他，石核や剥片も出土している。これらを検討すると，扁平片刃と思われる磨製石斧や石庖丁は弥生時代に特有な石器である。大泉式期の扁平片刃石斧は県内では未だ報告例がない。石庖丁は鱸沼遺跡でも報告されているが，本遺跡の石庖丁には２個の貫通孔があり，鱸沼遺跡のものと形態的に異なる。その他の石器は，縄文時代の遺跡においても普遍的にみられるものである。

以上のように，本遺跡での石器組成は弥生時代に特有なものと縄文時代においても普遍的なものの両者によって構成されている。このような石器組成にみられる傾向は，鱸沼遺跡・山王遺跡第３層などでも認められている。

４．遺構の年代

第２層は，出土土器の検討により弥生時代中期の大泉式期に形成されたものと考えられる。第３層は，第２層の下にあり，縄文時代中・後期の土器を出土するが弥生時代の土器を含まないことから，大泉式期以前の堆積層とみられる。

土壙２は第２層中で確認され，内部から弥生土器**C**群の一括品が出土している。したがって，第２層堆積後のものではあるが，大泉式期の中に含まれると推定される。土壙１は第２層上面で確認されたが，出土遺物がないことなどから年代は不明である。

溝１・溝２は第２層上面で確認され，遺物は出土していない。このことから，弥生時代よりも新しいものと考えられるが，年代は明らかでない。

５．遺跡の構成

遺跡は名取川によって形成された沖積段丘の微高地に立地している。この微高地は東原・山田段丘の段丘崖に続く平担面と，名取川に向ってゆるやかに傾斜する緩斜面からなる。今回の調査は，仙台南道路の路線敷にかかる南側緩斜面の部分に限られた。調査の結果，縄文時代の遺物を含む層，弥生時代の遺物を多量に含む層，弥生時代の土壙１基・時期不明の土壙１基・溝２本が発見された。

弥生時代の遺物を出土する層や土壙は，そのあり方や遺跡の立地などから，集落の一部を構成するものと考えられる。そして，集落における日常生活の主体となる居住の場などは，その周辺の微高地平担面にあったものと思われる。したがって，遺跡の範囲は微高地の平担面と，その周辺の斜面全体に及ぶものと考えられる。

III. ま と め

今回の調査で得られた成果をまとめると，次のようになる。

1．船渡前遺跡は名取川によって形成された沖積段丘の微高地上に立地している。

2．縄文時代の遺物が少量発見された。この時期の遺構は検出されなかった。

3．弥生時代の遺物を出土する層と，土壙が１基発見された。これらは集落の一部を構成するものと考えられた。

4．弥生土器は非常に量が多く，すべて弥生時代中期の大泉式に含まれるものと思われる。

5．大泉式期の石器組成は弥生時代特有の磨製石斧や石庖丁と，縄文時代においても普遍的な石器群によって構成されていた。

6．遺跡の立地，弥生時代の遺物を出土する層，土壙のあり方などから遺跡の範囲は，その周辺の斜面に及ぶものと考えられる。

引用　参考文献（引用順）

建設省国土地理院（1974）：『土地条件調査報告書』

伊東信雄・須藤　隆（1971）：『福島県福楽沢遺跡発掘調査報告書』郡山市教育委員会

伊東信雄・須藤　隆（1972）：『福島県柏山遺跡発掘調査報告書』郡山市教育委員会

目黒吉明（1969）：「弥生時代」『福島県史』第１巻　福島県

小牛田町教育委員会（1976）：『山前遺跡』

加藤　孝・後藤勝彦（1965）：「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史』資料篇　南方町

草間俊一・金子浩昌（1971）：『貝島貝塚』岩手県花泉町教育委員会

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』第１巻　宮城県

興野義一（1976）：「原始期」『一迫町史』　一迫町

須藤　隆（1973）：「土器組成論」『考古学研究』第19巻第４号

加藤　孝（1959）：「考古学上より見た塩釜市周辺の遺跡」『塩釜市史III，別篇Ｉ』　塩釜市

加藤　孝（1968）：「宮戸島貝塚寺下囲地区出土品に見られる弥生式文化」『仙台湾周辺の考古学的研究』

志間奏治（1971）：『鱸沼遺跡』宮城県教育委員会・東北電力株式会社

伊藤玄三（1966）：「東北」『日本の考古学Ⅱ，弥生時代』　河出書房

伊藤玄三（1969）：「東北」『新版考古学講座』第４巻　雄山閣

写真 6　船渡前遺跡
発掘前
（東側より）

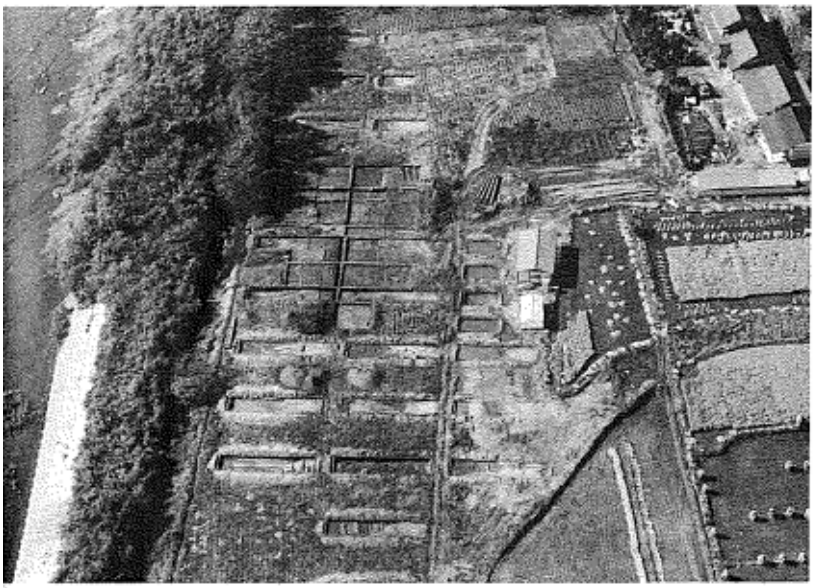


写真 7　遺跡発掘区
（東側より航空写真）

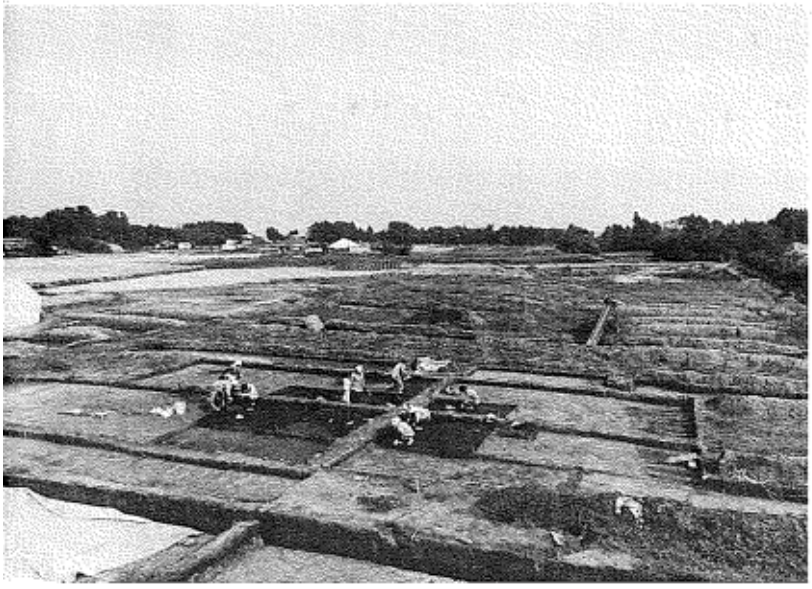


写真 8　遺跡発掘風景

写真 9　遺物包含層地区
（北側より）

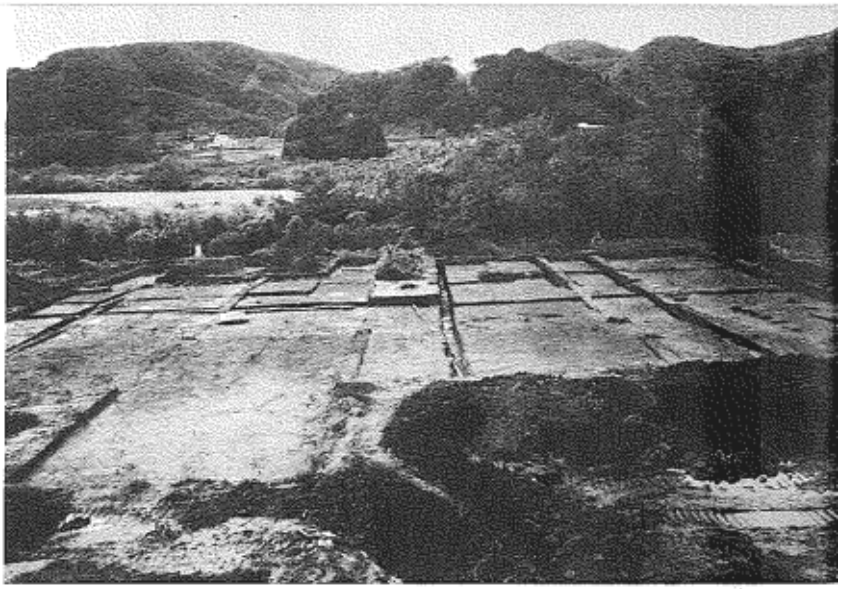


写真10　遺物出土状況

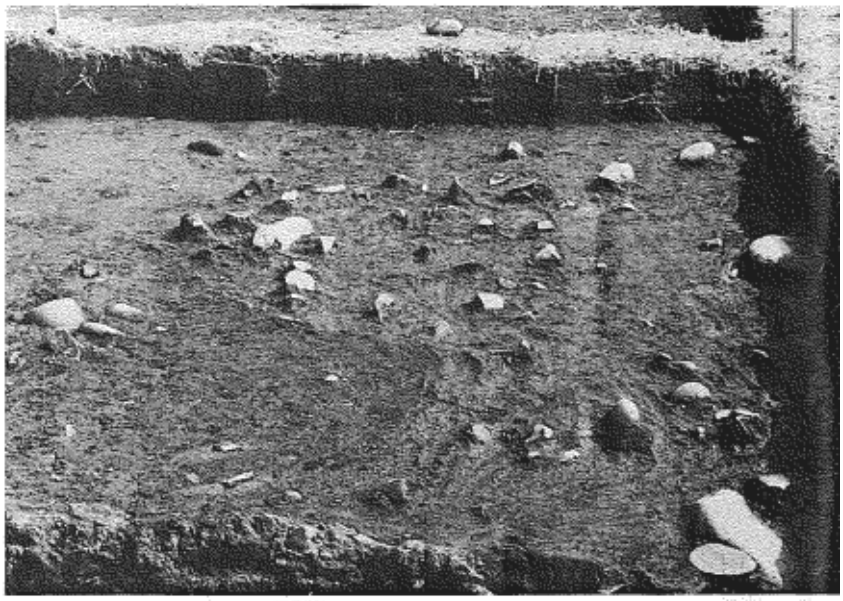
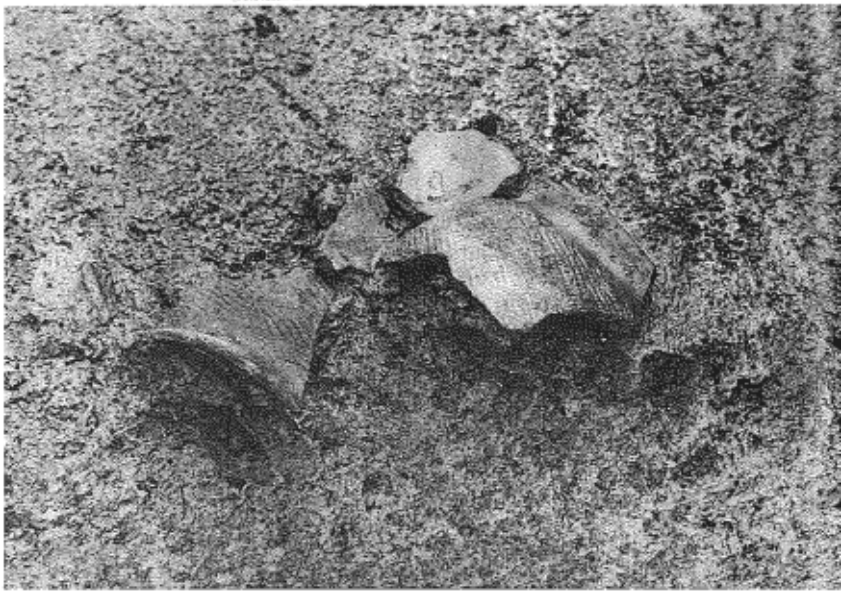
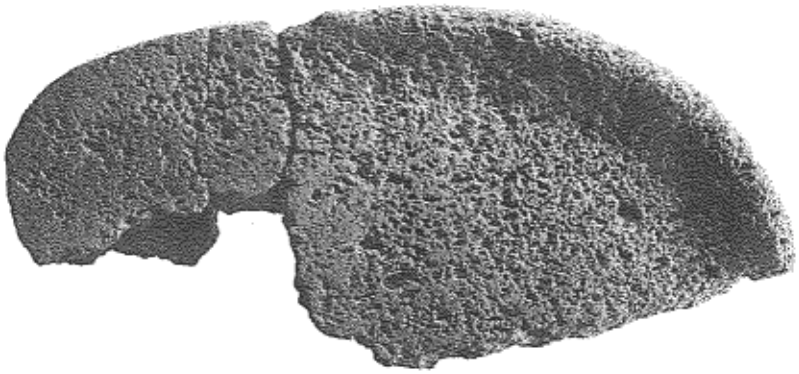
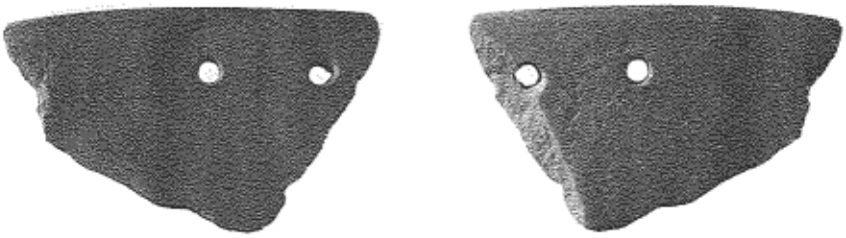


写真11　遺物出土状況





石　　皿（1/4）



石 庖 丁（1/2）

壺形土器（1/1）

石　　斧（1/1）

写真12